

14.4

1110

吳市勢要覽

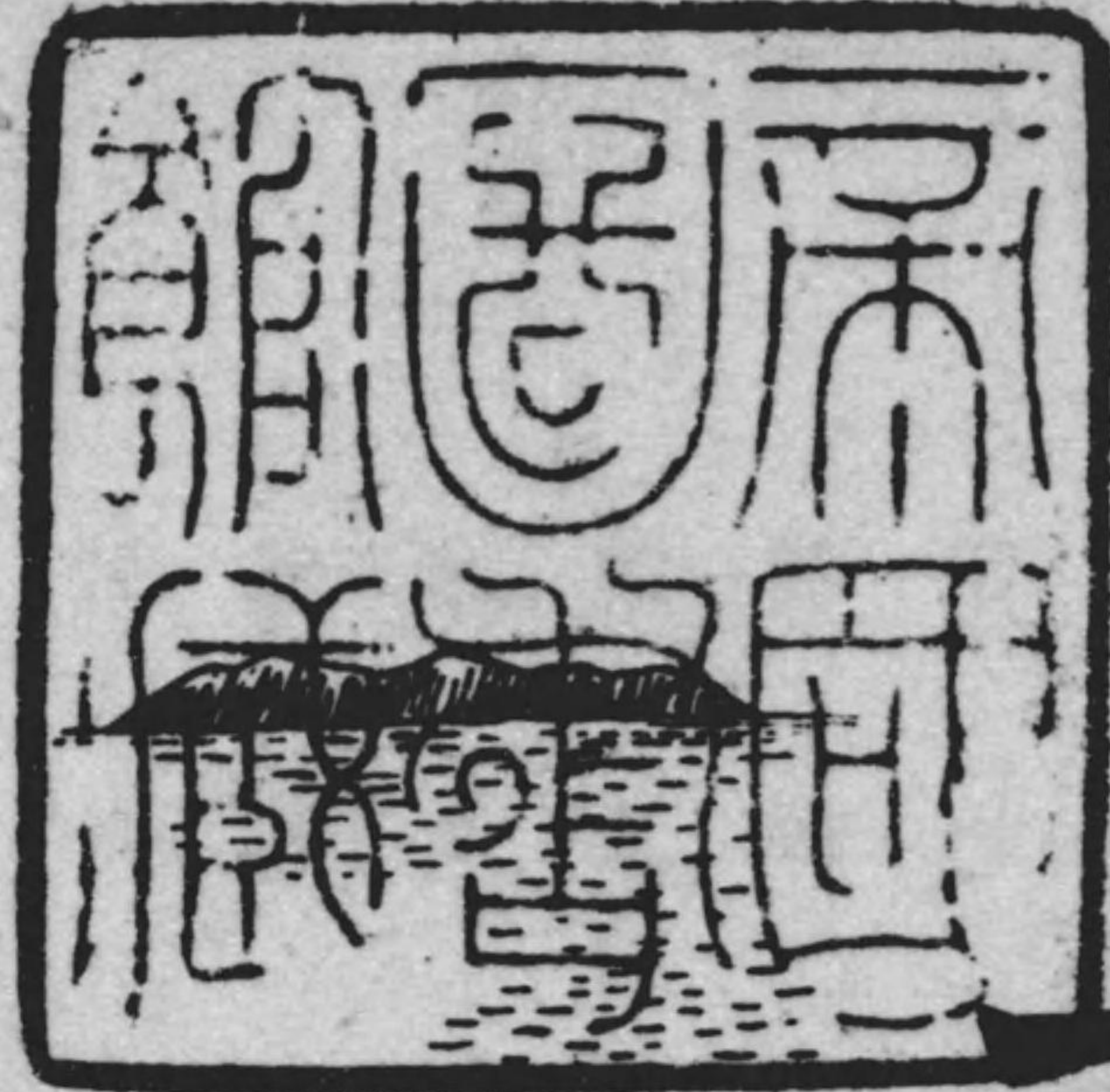
吳市役所編

昭和十四年版

吳市勢要覽

4.

11



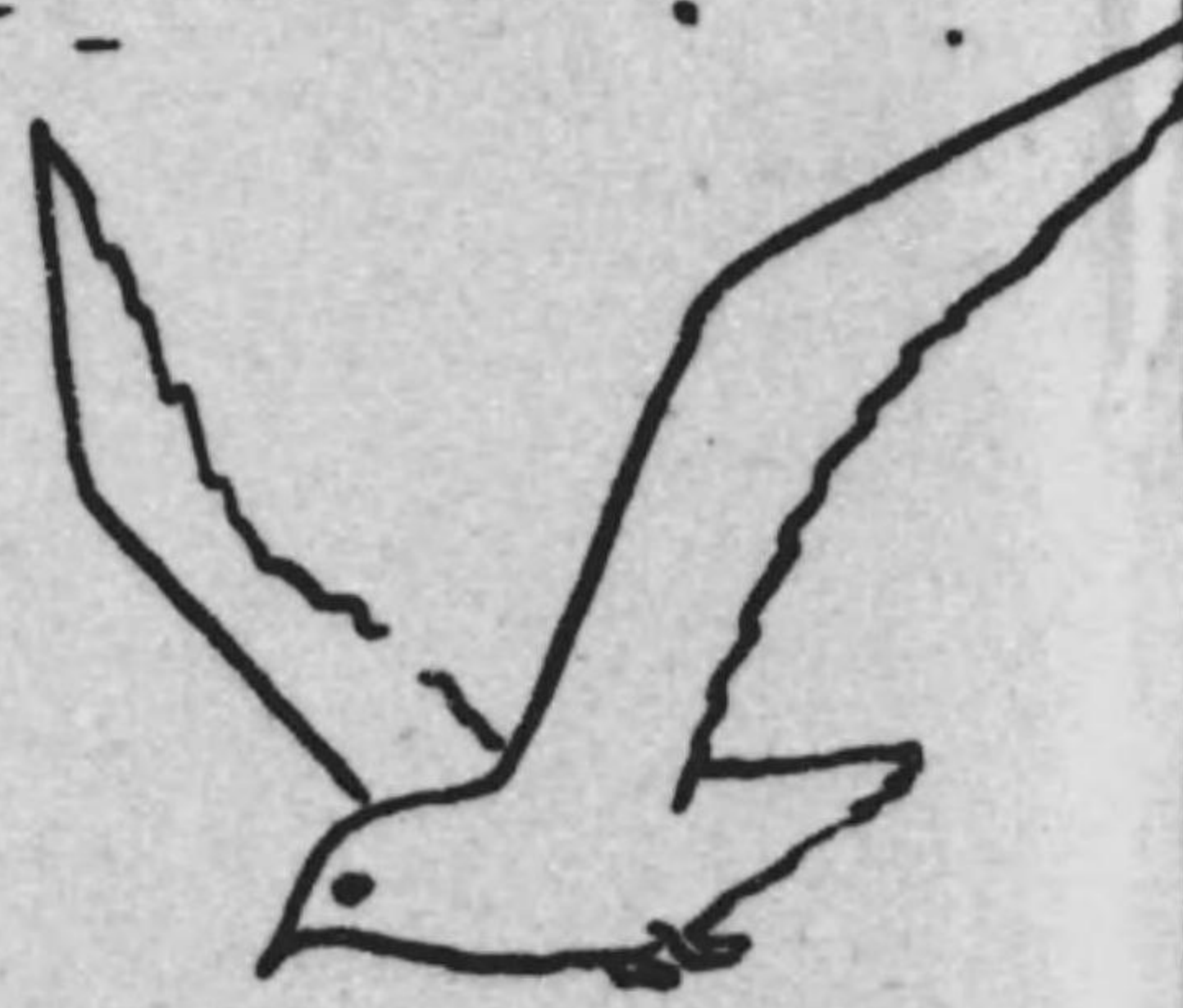
吳

市

勢

要

覽



14.8  
1110

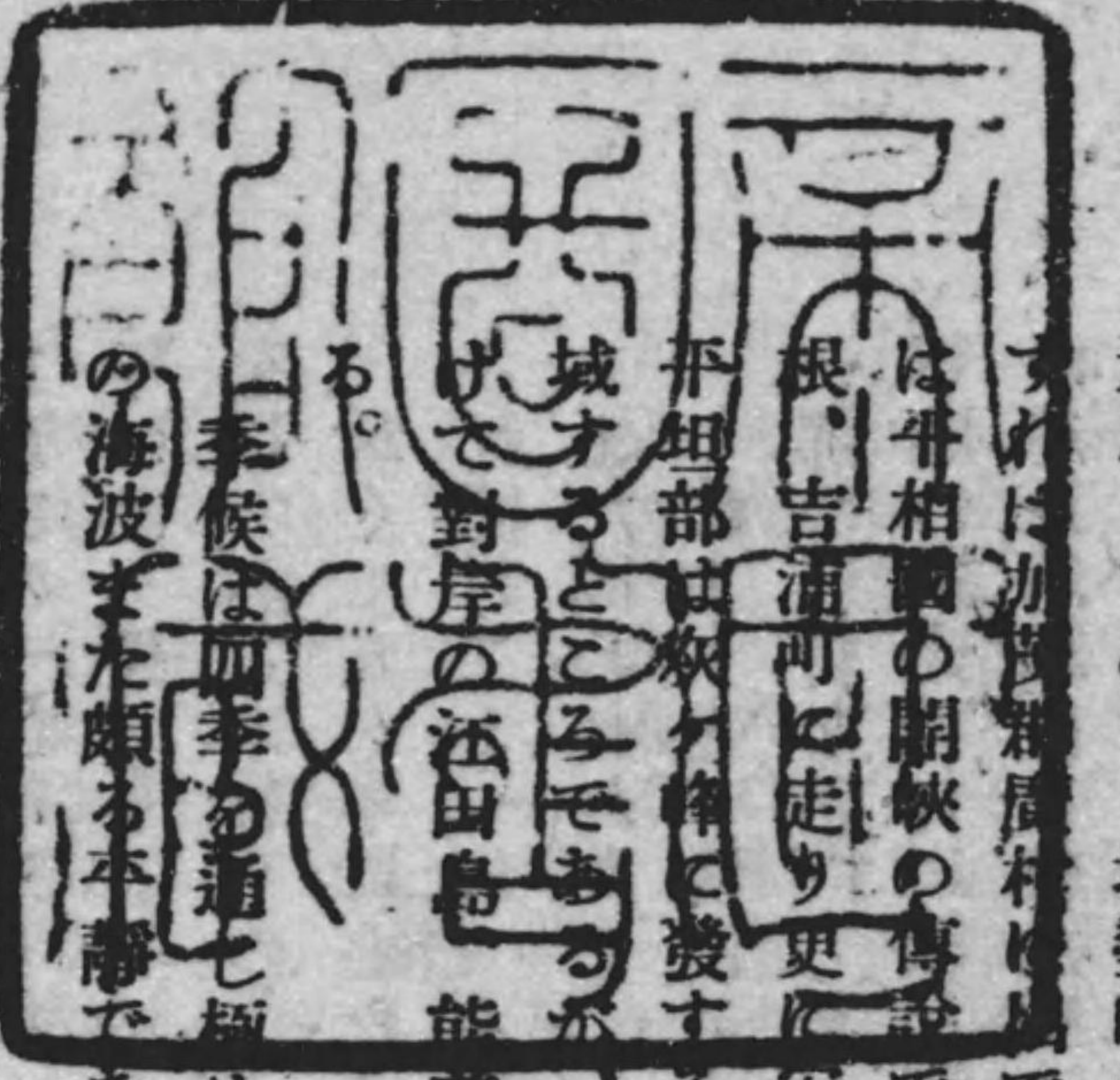
目次

第十一	第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
金融	産業	交通	社會事業	社會教育	教育	財政	市政機構	戶口	沿革概要	吳市の位置及地勢
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一一五	六六	六一	四八	三九	三〇	一四	六	三	一	一

吳市沿革概要

- 第十二 農畜水産業……………一一八
- 第十三 土木事業……………一二一
- 第十四 上水道の概要……………一二二
- 第十五 戸籍……………一二四
- 第十六 保健……………一二九
- 第十七 警察及警備……………一三三
- 第十八 神社及寺院……………一三六
- 第十九 附録……………一三七
- 第二十 軍港案内……………一三九
- 第二十一 吳及近郊の名勝……………一四〇

### 第一 吳市の位置及地勢



吳市は廣島縣西南部の一角を占める舊吳市、安藝郡吉浦町、警固屋町、加茂郡阿賀町を以て大吳市を形成してゐる、地勢的に見れば、市街地北背部には巍峨たる諸峰雌伏して安藝郡昭和村と接し、更に東は平相國の開峽の傳説で名高い音戸の瀬戸を距て、安藝郡倉橋島と相對し、西方に向つては婉々たる尾根、吉浦町に走り更に安藝郡大屋村に續いてゐる。

平坦部は秋津川に發する堺川および、安藝郡熊野町方面より昭和村を経て吳灣に入る二河川の二川に流れて居るところであるが、その大半は緩傾斜ながらも勾配上に立つてゐる、平坦部の南面する處、海に開けて對岸の浜田島、熊美島等との諸島と吳灣を抱き、遠く伊豫灘、燧灘等を距て、四國路と相對してゐる。

季候は四季の通じ極めて温順、夏は潮風をうけて涼味盡きず、嚴寒また九嶺諸峰に寒風を避け、灣内

### 第二 沿革概要

本市の發祥が遠く中古期以前にある事は舊記その他の實證によつても明らかであるが、近代科學の粹を蒐めた大軍港都市となつたのは僅々四五十年間のことである、明治初年までは宮原、和庄、莊山田、二川の四ヶ町村に分れ、天惠的に肥沃の地と豊漁の海を擁し、住民の生活は比較的豊かであつたが、地

勢的に交通の便を缺いでゐた、め他郷との交易なく、文化の程度は極めて低かつた、ところが明治初年に於ける我が國運の進展は第二第三海軍區の必要に迫られ、明治十六年には突如として吳灣及その近海の測量が始められ、それ迄は平和に明け暮れた吳浦の住民を驚かせた、文化の恩恵に薄かつた當時の住民の内には、此事を以つて一大事の突破と誤解した者も多く、流言蜚言さへ加へられて人心恟々たるものがあつたが、やがて吳浦に軍港ができ第二海軍鎮守府が置かれることが知れたので、昨日の憂ひは忽ち喜びの一色に塗り代へられた、翌十七年には、有栖川宮威仁親王殿下の御親察を仰ぎ、更に明治十八年には、長くも、明治天皇御臨幸の御ことがあつて愈々第二海軍鎮守府を此の地に御決定、明治十九年を以て前古未曾有の大工事は起され一躍天下羨望の地となつた。

かくて五ヶ年にわたる大工事も明治二十三年四月で竣工し、長くも、明治天皇には再度の行幸を仰出され同月二十一日、天皇御親臨のもとに鎮守府開廳の式を挙げられたが、こゝに於て大吳市建設の基礎もまた固められた。

これより先、明治二十一年四月一日市町村制が公布され、縣當局は宮原、和庄、莊山田および吉浦の一部の合併を諮問したが、住民の輿論は之を許さなかつた、そのうちに明治二十七八年の戦役が起つて軍港の擴充は日に夜を繼いでつづけられ明治二十年頃には戸數三千餘、人口一萬五千を出でなかつたものが日清戦役を経た明治三十一年には人口四萬、戸數も八千を超える驚異的激増を見せ、更に伸びゆく新興都市の勢は同三十五年には戸數一萬四千、人口六萬を算するに至り、同年十月一日を以つて多年懸案となつてゐた吳浦四ヶ町村の合併を遂げ吳市と呼んで市制を執行した。

市制を布かれた當時の吳軍港は日露大戰を控へ軍備の大擴充が行はれてゐたので市中も亦軍需景氣に煽られて益々膨れ、つづいて起つた歐洲大戰其の他の事變は事毎に吳市の發達を促したが市民も亦攸々

として市勢伸張に努めた結果昭和三年には臨接の吉浦、警固屋、阿賀の三町を合併して人口も一躍十七萬六千二百三十四、戸數三萬七千三百五十となつて名實共に大吳市を出現し、更に昭和六年以來起つた滿洲、上海事變の餘波は恰も一九三六年後に來る世界的危機に直面してゐただけに我が國民の非常時意識に拍車をかけ、各種工作は晝夜を分たす續けられたが、本市は我が國防の中心をなす軍都であるだけに軍部の活況も目醒ましく、これと緊密な關係を持つ市中も亦非常時景氣の波に乗つて今や全國稀に見る好況を見せ交通運輸の驚異的發達と相俟つて多幸多望な躍進をつゞけ、昭和十二年七月今次支那事變起るや市中は平和産業に於ては幾分の衰微を見るも股賑方面への進出愈々頻繁となつて全國稀に見る活況を呈し、人口も愈々膨脹して昭和十三年末は二十五萬四千八百十八名を算し軍港吳市の面目益々躍如たるものがある。

### 第三戸口

#### 戸口の増加趨勢

吳浦一帯には古くから半農半漁の住民あり、寛政時代既に三村落密集して戸數千四百餘、人口七千餘を數へてゐたことが古書に記録されてゐる。地勢的關係は他郷との交易に薄く、戸口は部落民の自然増加を待つ程度であり、それから約百年を経た明治五年の戸籍簿創設當時でも二千七百の戸數、一萬一千餘の人口に過ぎなかつた、然し明治二十年頃から起された吳海軍創設の大事業は忽ち本市の形態を一變し續いて勃發した日清戦争以下各種戦役事變、或は時運による各種施設の擴充強化は更に市勢の伸張にも顯はれ、吳軍港は一意發展の一途を辿り、軍港開設後僅々五十年を経たに過ぎぬ今日であるが、人口

二十五萬四千八百十八名、戸數四万六千六百六十九戸に達し、依然全國第九の地位を保つてゐる。

戸口表

年次	戸數	人口		計
		男	女	
昭和十三年	五〇、四六五	一四一、五五六	一一三、二六三	二五四、八一九
全 十 二 年	五二、三三九	一三七、七九九	一〇九、九九九	二四七、七九八
全 十 一 年	四八、二七三	一三三、九九九	一〇六、二七六	二四〇、二七五
全 十 年	四七、二八〇	一三九、一〇七	一〇一、三三三	二四〇、四四〇
全 九 年	四四、五二四	一四〇、〇七	一〇三、一八四	二四三、二五二
全 八 年	四二、六九〇	一三八、五三三	一〇一、九四〇	二四〇、四七三
全 三 年(三町合併當時)	三七、三五〇	九一、八三八	八四、三九六	一七六、二三四
明治二十年(軍港創設當時)	三、五三五	七、九四一	七、二二七	一五、一六八

職業別に見た戸口

本市は世界屈指の軍港地であり、大官業工場を得つ關係上、工業戸口の多いのが特に目立つ、その大部分が工務従業員であることは云ふまでもない、次で商業戸口が断然數字を上げてゐるのも本市が消費力旺盛なる大軍港地であり、しかも古くからの藝南地方中心の物資集散地であることを物語るものである、然して時局關係から昨今は平和産業方面の企業には前年の盛觀を失つたかの觀ないでもないが、業者の

自覺、決断は巧みに股販産業への轉換を遂げ、依然として工業發展の途は絶へないのみならず、將來の工業都市的發達が約束できるものである。現住職業分類左の通り

現住者職業

職業分類	世帶數	本業		副業	
		人口		人口	
		總數	男女	總數	男女
農 業	計	一、五〇〇	三、七五五	二、二八九	一、四六六
		自作農作	一、五六四	九八八	六四六
		小作農作	九七六	五五一	四二五
農 業	計	五九	一、二二五	八二〇	三九五
		自作兼小作農作	三、七五五	二、二八九	一、四六六
		計	一、五〇〇	三、七五五	二、二八九
其 他	計	一、五三二	三、八二四	二、三三三	一、四九二
		計	三、八二四	二、三三三	一、四九二
		計	一、五三二	三、八二四	二、三三三
水 産	計	三六五	六四	五八二	三三
		計	三六五	六四	五八二
		計	三六五	六四	五八二
工 業	計	三〇、六九四	五六、一六三	四一、一四一	一五、〇三三
		計	三〇、六九四	五六、一六三	四一、一四一
		計	三〇、六九四	五六、一六三	四一、一四一
商 業	計	一三、一五四	二九、五九五	一六、九九七	二二、六二四
		計	一三、一五四	二九、五九五	一六、九九七
		計	一三、一五四	二九、五九五	一六、九九七

業	職	無	計		
			其	公	交
計	其	收入	ノ	務	通
他	ノ	= 依	他	自	業
者	者	ル	有	由	業
者	者	ル	業	業	者
二、三六	一、〇六	一、二九〇	五三、〇八九	一、八九五	一、八九五
一、〇六	一、〇六	一、九六五	二、六九八	二、五二八	二、五二八
一、〇六	一、〇六	一、三六五	四、二六五	二、二三八	二、二三八
一、〇六	一、〇六	一、三六五	八、一七六	二、二三八	二、二三八
一、〇六	一、〇六	一、三六五	一、三三三	七、九八	七、九八
一、〇六	一、〇六	一、三六五	四、一五四	四、〇三	四、〇三
一、〇六	一、〇六	一、三六五	七、二四六	三、九八二	三、九八二
一、〇六	一、〇六	一、三六五	七、二四六	七、五〇九	七、五〇九
一、〇六	一、〇六	一、三六五	六、九四	一、六九四	一、六九四
一、〇六	一、〇六	一、三六五	四、八五八	四、八五八	四、八五八
一、〇六	一、〇六	一、三六五	二、九三六	二、九三六	二、九三六

第四市政機構

明治三十五年十月一日市制を布かれて同日開廳、翌三十六年二月初代市長佐久間義一郎氏就任し諸機構全く成る。爾來三十八星霜、海軍の擴充に伴ひ市勢又驚異的の伸張を示したが、それだけ複雑多岐を極め、然もその運用如何は直ちに都市發展に反影するので、一日たりとも忽に出來難く、機構、施設の改革、改善は從來幾多行はれたが、現在では市長、二助役、收入役の下に二部十六課を置いて万善を期し上水道擴張工事に關しては擴張部を設けて用度、第一、二工營の三課を設け擴張工事並事務の進捗を圖つてゐる、尙吉浦、警固屋、阿賀町には各出張所を置き、戸籍事務其他市民の便宜に供してゐる。

市長

次	氏	就	任	退	任
第一	佐久間義一郎	明治三十六年二月十日就任	全 四十二年八月十一日任期滿了	明治三十六年六月八日死	亡
第二	荒尾金吾	全 三十二年九月二十九日就任	全 四十四年八月二十八日病氣辭任	全 四十二年八月十一日任期滿了	
第三	全原俊雄	全 四十四年十二月二十八日就任	大正四年十一月十九日任期滿了	大正四年十一月十九日任期滿了	
第四	全原俊雄	大正四年十二月九日就任	全 六年七月六日辭任認可	全 六年七月六日辭任認可	
第五	天野健太郎	大正六年八月十七日就任	大正十年八月十六日任期滿了	大正十年八月十六日任期滿了	
第六	春藤嘉平	全 十一年二月二日就任	全 十四年一月十六日辭任認可	全 十四年一月十六日辭任認可	
第七	橋本正治	全 十四年四月二十四日就任	昭和二年三月十一日辭任	昭和二年三月十一日辭任	
第八	勝田登一	昭和二年六月十三日就任	全 五年十一月二十五日辭任	全 五年十一月二十五日辭任	
第九	佐々木英夫	全 五年十一月二十五日就任	全 七年十二月二十一日辭任	全 七年十二月二十一日辭任	
第十	渡邊英夫	全 七年十二月二十六日就任	全 十年五月十二日辭任	全 十年五月十二日辭任	
第十一	松本勝太郎	昭和十年六月十三日就任	昭和十一年九月一日辭任	昭和十一年九月一日辭任	
第十二	水野甚次郎	全 十二年四月五日就任	在職	在職	
第十三	水野甚次郎	全 十二年四月五日就任	在職	在職	







名が常置され市政の圓滿なる運行を期してゐる、又各町には二百七十三町總代、百十二方面委員の外衛生組合長、戸主會長等を設けて益々その機能を發揮してゐる。又臨時犒軍委員十七名を特に設置してゐる。

市會議長

次	氏名	當選年月日	在任期間
第一	佐々木高榮	明治三十六年一月八日	一ヶ年
第二	全	全三十七年一月八日	全
第三	全	全三十八年一月八日	全
第四	全	全三十九年一月八日	全
第五	全	全四十年一月八日	全
第六	全	全四十一年一月八日	全
第七	全	全四十二年一月八日	全
第八	全	全四十三年一月八日	全
第九	天野健太郎	全四十四年一月八日	全
第十	全	全四十五年一月八日	全
第十一	全	大正五年二月三日	一ヶ年
第十二	全	全六年七月二日	二ヶ年
第十三	全	全九年二月九日	四ヶ年
第十四	澤野養方	全十三年二月四日	一ヶ年

市會副議長

次	氏名	當選年月日	在任期間
第十五	勝田登一	大正十四年十月二十二日	十六ヶ月
第十六	水野甚次郎	全昭町二年三月十九日	十六ヶ月
第十七	宮原幸三郎	全昭町二年三月十九日	十六ヶ月
第十八	澤原精一	全昭町二年三月十九日	十六ヶ月
第十九	水野甚次郎	全七年二月一日	三年四ヶ月
第二十	篤野晴興	全十年五月十二日	十年四ヶ月
第二十一	兒玉主計	全十一年二月一日	八ヶ月
第二十二	勝田友彦	全十一年十一月二十日	全
第二十三	山形謙二	全十二年七月三日	全

次	氏名	當選年月日	在任期間
第一	澤原精一	明治三十六年一月八日	一ヶ年
第二	全	全三十七年一月八日	全
第三	小林芳樹	全三十八年一月八日	全
第四	全	全三十九年一月八日	全
第五	全	全四十年一月八日	全
第六	全	全四十一年一月八日	全
第七	近藤良幹	全四十二年一月八日	全
第八	今中富三郎	全四十四年一月八日	全

第九次	宮崎俊太郎	全四十四年一月八日	全
第十次	濱本侃二	全四十五年二月三日	全
第十一次	山下吉十郎	大正元年十二月十三日	全
第十二次	全	全五年二月三日	全
第十三次	全	全九年二月九日	全
第十四次	宮原一	昭和十三年二月四日	全
第十五次	宮田群一	昭和七年二月一日	全
第十六次	篤晴興	全七年四月十七日	全
第十七次	若山作一	全八年二月一日	全
第十八次	全	全十一年二月二十日	全
第十九次	宇根繁人	全十一年七月三日	全
第二十次	出野繁人	全十二年七月三日	全

第五財 政

都市膨脹の趨勢と、時運の活潑なる進展は都市に於ける各種施設の要求を益々繁多ならしめ、是に伴ふ所要経費の増加もまた必然的に招來される。本市は明治二十三年吳鎮守府が創設せられ、引續く海軍の擴充は市勢にもその儘反影して短時日に戸口の激増を示し、事業の急速なる實施、各般の施設は年と共に繁激となり、市の財政また逐年膨脹を續けてゐる、即ち市制施行當時は二万二千餘圓に過ぎなかつた歳出も、昭和十四年度に於ては一般會計だけでも三百萬圓（當初豫算）に垂々とするに至り、然も擔

稅者の殆んどが擔稅力の低い給料生活者であるのに反して、軍港都市としての特種施設、殊に教育、衛生方面には一段の考慮を拂はねばならない、故に、市費と擔稅力の均衡を保つためには多大な苦心が拂はれ、しかもこれにより運用する市經費の切廻しは相當困難を感じてゐる。

吳市歳入歳出決算調書

年 度	歳入決算額	歳 出 決 算 額		
		經常部	臨時部	合計
明治三十五年度	三三、七〇、六九五	三〇、三九、五一一	二、三四、一七五	三三、五三、六八七
全 三十六年度	九一、六九、四〇六	六〇、一四六、四九九	三三、六二四、七五一	八三、七六一、二〇六
大正 元 年 度	三六〇、七〇九、六五五	三二一、四一六、〇三二	三五七、一九〇、一六五	二五六、六〇六、一九六
昭和 元 年 度	一、七四〇、一一、五八八	八九九、〇四三、四六〇	五五七、六二九、一九〇	一、四五五、五七二、六五〇
昭和 十 年 度	二、五九四、九八八、九三六	一、一〇三、〇四七、九〇〇	七四二、四一八、四〇〇	一、九四五、四六六、三〇〇
昭和 十 一 年 度	三、五五四、五八〇、五二六	一、一三四、二七三、九〇〇	一、五六七、〇六三、二五〇	二、八〇一、三三六、一五〇
昭和 十 二 年 度	三、〇〇五、〇五四、三三六	一、四五六、六二六、二〇〇	九六五、六七〇、六〇〇	二、四四四、二三三、八〇〇

歳入歳出を豫算に見る

昭和十四年度一般會計各種目別歳入歳出當初豫算及其の千分比は左の通りであるが、本市の特殊性を示すものは歳入に於て約二分の一を稅收入に依らざるを得ぬに對し歳出に於ては教育、衛生費等軍港都市特別の施設を要求せられ然も緊縮豫算で市勢運用を計らねばならぬ市理事者の苦心は本豫算に折込されてゐるものである。

昭和十四年度各種目別歳入歳出

(一般會計當初豫算)

事業別	入		出	
	金額	千分比	金額	千分比
財産収入	一七、八二四	〇、〇六	三六、六〇一	一、三三
使用料及手数料	一九、六七三	〇、六五	一、一〇三、三八三	三、七三
國庫交付金	六八、五八四	二、三三	四三〇、三三五	一、四五
國庫下渡金	三三三、四四六	一、一三	三七五、四一八	一、二七
臨時地方財政補助金	三三、四五三	〇、〇八	五、九六六	〇、一九
報償金	八、〇五六	〇、〇三	六、〇二五	〇、二〇
國庫補助金	三六、二八七	〇、一三	一九、三三八	〇、〇七
縣補助金	三一、〇二六	〇、一〇	二六、三〇八	〇、八九
獎勵金	九六五	〇、〇一	二九、三〇八	〇、九八
寄附金	一八、〇〇一	〇、〇六	二、九六二、六四二	一、〇〇
繰越金	三〇、〇〇〇	〇、一〇		
納付金	三一、九八八	〇、一〇		
財産賣拂	一八七、〇九〇	〇、六三		
雑収入	五四、七五二	〇、一八		
市税	一、四〇六、九九八	四、七五		
市債	五二、一五〇	一、七六		
合計	二、九六二、六四二	一、〇〇		
事業別			合計	
總計			二、九六二、六四二	一、〇〇

決算から見た市勢

軍港所在地たる本市は相次ぐ海軍の擴充により急激に戸口の増加を示し、之に伴ふ教育、衛生其他各般の施設は勿論、帝國海軍々事根據地たる後方施設の完璧を期する等、國防、軍事上よりも之が施設に積極的協力を要する等、市の財政もまた逐年膨脹を續けてゐる。

即ち市制施行當時は八万三千圓に過ぎなかつた歳出も、昭和十四年度に以ては一般會計當初豫算に於ては正に三百萬圓に垂とする現況であり、然も急激なる人口増加も擔稅力薄弱者を主とするため、收支の均衡愈々保ち難く之が運用に當る市理事者の苦心も亦大なるものがある。

吳市歳入歳出決算調書

年 度	歳入決算額	歳出決算額		
		經常部	臨時部	合計
明治三十五年度	二二、三二〇、六九五	二〇、三三九、五〇一	二、二四四、一七五	二二、五七三、六六七
全 三 十 六 年 度	九一、六九九、四〇六	六〇、一四六、四〇九	三三、六一四、七五一	八三、七六一、一六〇
大 正 元 年 度	三六〇、七九〇、六五五	三三二、四六六、〇三一	三五、一九〇、一六五	三五六、六〇六、一九六
昭 和 元 年 度	一、七四〇、一一、五二八	八九八、〇四三、四六〇	五五七、六九一、一九〇	一、四五五、六七二、六五〇
全 九 年 度	二、一九五、三〇、五七六	一、二三、九八、七五〇	六二〇、一九二、二五〇	一、七四四、一三、〇〇〇
全 十 一 年 度	三、五五四、五八〇、五三六	一、二三四、二七三、九〇〇	一、五六七、〇六三、二五〇	二、八〇一、三三六、一五〇
全 十 二 年 度	三、〇〇五、〇五四、三三六	一、四五八、六六六、二二〇	九六五、六七〇、〇六〇	二、四四四、二三三、二八〇



市 稅

全	全	全	全	全	特別會計 公設質屋費	全	全	全
費	廣島吳間國道改良 附	全	土木費中道路費 (宮原通線)	全	道路委託工事費	全	道路委託工事費	全
費	廣島吳間國道改良 附	全	住友銀行	全	保險院簡易	全	大藏省	全
三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	一,〇〇〇	三七,〇〇〇	一六,〇〇〇	五〇,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
全	全	全	全	全	全	全	全	全
三分二厘	三分二厘	三分九厘	四分二厘	三分二厘	四分二厘	三分二厘	三分二厘	三分二厘
三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	七,七九〇	三七,〇〇〇	一六,〇〇〇	五〇,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
昭和四一〇	昭和四一〇	昭和一一一	昭和五二五	昭和一一四	昭和一一四	昭和一一四	昭和一一四	昭和一一四
昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇

全	全	全	全	全	全	全	全	全
費	廣島吳間國道改良 附	全	土木費中道路費 (宮原通線)	全	道路委託工事費	全	道路委託工事費	全
費	廣島吳間國道改良 附	全	住友銀行	全	保險院簡易	全	大藏省	全
三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	一,〇〇〇	三七,〇〇〇	一六,〇〇〇	五〇,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
全	全	全	全	全	全	全	全	全
三分二厘	三分二厘	三分九厘	四分二厘	三分二厘	四分二厘	三分二厘	三分二厘	三分二厘
三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	七,七九〇	三七,〇〇〇	一六,〇〇〇	五〇,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇
昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇	昭和一一〇

地理的其他特殊的情况にある本市であるから企業の財源無く、歳入の大半を税収入に求めてゐる、然も財政は逐年膨脹の一途にあり税の増嵩も亦已むを得ないものである、市制施行後に於ける市税及税外収入、市税負擔の趨勢左の通り。

歳入ノ内容及市税ト負擔額

(一般會計決算額)

年 度	歳 入 額	市 内		市 外 收 入	市 外 收 入	
		市 内	市 外		市 外	市 外
明治三十六年度	九一、六九	五、七五	三、七五	三、七五	三、七五	一、八二
明治四十年度	四七、四七	九、六四	三、七五	三、七五	三、七五	一、〇三
大正元年度	三六、七〇	一七、六九	一、九〇	一、九〇	一、九〇	一、三六
大正十年度	一、一九、九八	六、六七	四、九二	四、九二	四、九二	四、七〇
昭和元年度	一、七〇、一一	六、九〇	一、〇四	一、〇四	一、〇四	二、七〇
昭和五年度	二、二七、一五	八、九六	一、三二	一、三二	一、三二	四、九三
昭和六年度	二、二六、三四	八、五八	一、四三	一、四三	一、四三	四、六二
昭和七年度	二、三四、六八	八、五三	一、四八	一、四八	一、四八	四、四四
昭和八年度	三、〇六、四七	九、三〇	二、三六	二、三六	二、三六	四、三九
昭和九年度	二、九五、三五	一、〇九	一、二六	一、二六	一、二六	四、九
昭和十年度	二、五四、九八	一、四〇	一、四四	一、四四	一、四四	四、九五
昭和十一年度	三、五四、五八〇	一、〇四	二、三〇	二、三〇	二、三〇	五、〇三
昭和十二年度	三、〇五、〇五	一、二四	一、七〇	一、七〇	一、七〇	五、〇四

市税負擔の状況

市費の大半を占むる市税に對し市民は如何なる賦課を受けてゐるか、昭和十三年度に於ける市税各賦課率及豫算は左の通りである。

市税賦課の狀態

税 目	種 別	課 率 (單位)	昭和十三年 度 額	百 分 比
地 租 附 加 税	本 税 一 圓 = 付	一、〇三〇	七、七四	
特 別 地 税 附 加 税	賃 貸 價 額 百 圓 = 付	三、八九六	二、〇八六	
營 業 收 益 税 附 加 税	本 税 一 圓 = 付	一、〇三〇	一、九七、七四七	
家 屋 税 附 加 税	全	一、〇〇〇	二、四八、〇五三	
營 業 税 附 加 税	全	一、〇〇〇	二、五、三〇〇	
雜 種 税	全	一、一〇〇	二、三、八二三	
電 氣 柱	全	四、六〇〇	一、一、六三三	
自 動 車	全	一、一〇〇	三、九七	
附 加 税	全	〇、五〇〇	一、四、五〇〇	
附 加 税	全	〇、五〇〇	八、五三三	
其 他	全	一、〇〇〇	一、三、七、四六七	
計	計	〇、六五〇	六八、七六三	
合 計	計		一、三、九、一九九	



市税の税種及收入變遷

地方費の膨脹は畢竟之が財源窮乏となり、爲に凡有財源を漁つて課税し來つた結果は税制又雜然たるものとなつたが、大正十五年斷行せられた國稅整理と相俟ち、地方税制また整理せられ爾來逐次改變を行はれて今日に至つたが、本市に於ける市制施行後の市税々種をよび之が變遷左の通りである。

市税の税種及收入の變遷

(決算額)

税目	明治三十六年度	大正元年度	大正十年度	昭和元年度	昭和五年度	昭和十三年度
地租 附加税	(地價割) 一、九三〇	(全) 三、七七〇	一五、一四〇	一九、八三六	二八、五二六	九、二五九
特別地稅 附加税	(國稅營業割) 五、四〇〇	(全) 九、一四六	(國稅營業稅附加稅) (全) 六五、六七七	八九二	三、六一〇	二、〇七七
營業收益稅附加税	(縣稅營業割) 八、六六六	(全) 七、四〇〇	(特別稅家屋稅) (縣稅營業割附加稅) (全) 四、四九七	一〇一、七七八	二二、五五三	三三六、六六七
家屋稅 附加税	(戶數割) 二九、七三三	(全) 一八、四三三	(戶數割附加稅) (全) 三九〇、七四〇	一三、七二八	一九、五七一	一五〇、六三七
營業稅 附加税	(戶數割) 二九、七三三	(全) 一八、四三三	(戶數割附加稅) (全) 三九〇、七四〇	九四、四二九	一八、八五五	二七、三九三
雜種稅 附加税	(戶數割) 二九、七三三	(全) 一八、四三三	(戶數割附加稅) (全) 三九〇、七四〇	八、〇七四	一三、七二五	一六八、七五〇
特別稅 戶數割	(戶數割) 二九、七三三	(全) 一八、四三三	(戶數割附加稅) (全) 三九〇、七四〇	四七、四二七	四七、四二七	六三九、三九九
特別稅 觀覽稅	(戶數割) 二九、七三三	(全) 一八、四三三	(戶數割附加稅) (全) 三九〇、七四〇	八、八五四	八、八五四	
(遊興稅 附加稅)	(戶數割) 二九、七三三	(全) 一八、四三三	(戶數割附加稅) (全) 三九〇、七四〇	一〇、八六七		
(所得稅 附加稅)	(所得割) 八、〇三五	一六、三四三	三四、三二七	五四、一九六		

税目	明治三十六年度	大正元年度	大正十年度	昭和元年度	昭和五年度	昭和十三年度
(土地建物所有) (樹移轉稅)	三、〇三六	三、〇三六				
(電柱稅)	三、〇三六	三、〇三六				
(賣藥營業稅)	三、〇三六	三、〇三六				
計	五、七五五	一四〇,〇〇〇	六六七,三七一	六九四,〇二五	八九六,一〇〇	一,三〇三,一五二

各種租稅增加狀況

然して市民の負擔する國、縣、市税の賦課狀況は左の通りであるが、市勢伸展に伴ふ増高は已むを得ぬものである。

各種租稅增加ノ狀況

年 度	國 稅	縣 稅	市 稅	合 計	備 考
明治三十六年度	二九、三七五	二六、七九六	五三、七五	一〇九、九四六	1. 國稅ハ直接國稅トス
全 四 十 年 度	一一六、七二二	四八、六一四	九九、六四八	二六四、九七四	2. 稅額ハ何レモ收入濟額トス
大 正 元 年 度	一九一、三五六	六四、四六八	一七〇、六九七	四二六、五二一	3. 過誤納額ハ收入濟額ニ算入ス
全 五 年 度	一三四、五六六	七五、八三三	一八〇、五六八	三九〇、九五六	
全 十 年 度	四九九、一二六	三二九、八三三	六六七、三七一	一、四八六、三六〇	
昭 和 元 年 度	五二六、八四二	三三〇、〇七七	六九四、〇二五	一、五八〇、九三三	
全 五 年 度	四九一、九〇〇	五四六、八〇七	八九六、〇〇〇	一、九三四、八〇七	
全 九 年 度	六五三、四一〇	六三二、八三三	一、〇一九、一九三	二、三〇五、四三六	

全十一年度	七五九、八六九	七〇二、二二一	一、一四〇、五九七	二、六〇二、六七七
全十二年	九六六、四六四	七六九、三八八	一、二〇四、五三三	二、九四〇、三七五
全十三年	一、四七四、九九八	八六四、六七三	一、二八四、七七七	三、六二四、四七七
全十三年度	三、一三三、〇三九	八五三、五九六	一、四〇九、三〇一	四、二九八、八六九

各種税収納成績

本市の各種租税納税成績は、納税組合の活動及納税の督奨勵により益々昂上を示し、昭和十三年度に於ける國縣市税定期収入歩合は

國税 九割九分九厘 縣税 九割九分八厘 市税 九割九分七厘  
 1. 直接國税 (昭和十三年度)

税目	調定済額	収入済額	缺損額	翌年度へ繰越額	収入割合
所得税	一、一八三、九四六、三三	一、一八二、九二七、五三	一、八八〇		九九九、九九九
地租	一〇九、五八七、二二	一〇九、五八七、二二			一、〇〇〇
營業收益税	一九七、五八四、三六	一九七、五七三、九三	一〇、四五		九九九
資本利子税	四、四五二、二〇	四、四五二、二〇			一、〇〇〇
相續業	三三、七〇四、五三	三三、七〇四、五三			一、〇〇〇
合	五〇五、八七	五〇五、八七			一、〇〇〇

2. 縣税

(昭和十三年度)

臨時所得税	合
計	一、八三三、五九〇、三三
計	一、八三三、五六一、二六
計	二九、三五
計	一、〇〇〇
計	九九九

3. 市税

(昭和十三年度)

税目	調定済額	収入済額	缺損額	翌年度へ繰越額	収入歩合
地租附加税	九七、二三、七六	九七、二二、〇三		二、七三	九九九
特別附加地租	一、六四七、一四	一、六四七、一四			一、〇〇〇
所得附加税	三三五、五四一、三三	三三五、四八九、五九	二、〇一	四九、六三	九九九
營業收益税附加税	一三四、六四五、四四	一三四、三〇五、一五	一七、七三	三三、五七	九九七
家屋税	二〇九、六一、四一	二〇九、四三、四一	八	一八七、三	九九九
營業種別	二七、四九六、四四	二七、三九四、三九	一〇、三四	九一、七二	九九六
雜種	一四三、六二四、四三	一四三、一五〇、九六	三八、九五	四三四、五三	九九六
都市計畫特別	四、七六四、三六	四、七六〇、九〇	一、〇三	二、四四	九九九
營業收益特別	八五四、五四四、二二	八五三、三八一、五七	七〇、九三	一、〇九一、七三	九九八
合					



# 第六教育

## 中等教育

都市發展の歸趨として教育も亦異狀な進歩を示し、鎮守府開廳後に於ける上級學校進學者は相當な數を示してゐたが、中等學校の施設を有せぬ本市居住子弟はいづれも廣島其他に進學してゐたものでありその爲中途退學等の已むなきに至る者も尠からざる情況に鑑み明治三十九年市會の滿場一致の決議を以て市立中學校を三津田ヶ丘に設立、續いて市立高等女學校を五番町に設立したが、極みなき本市の發展は忽ちにして入學難を現出、之が學校増設も要望されたが、貧弱なる本市財政では如何ともなし難く明治四十四年先づ中學校を縣營に移し、更に大正九年女學校を縣に移管して同年市立實科高等女學校を設立（大正十三年高等女學校に變更）つづいて十三年再び市立中學校を設立したが、昭和四年再び縣營に之を移管、本市では専ら市立高等女學校及大正十五年創立した市立實科高等女學校のみの經營に當つてゐるが、この間各私立中等學校、各種學校も相尋で興され、更に晝間は商店其地勞務に従事する人々のための夜間中學校、商業學校等も設けられてゐるが、戸口激増する本市の入學難は益々深刻化し實業教育機關の創設と共に之が増設が熱望されてゐる。

### 公私立中等學校

學校名	所在地	創立年月	修業年限	生徒數	學級數	教員數	設立者
吳海軍工廠教育所	吳海軍工廠内	大正七年十一月	(1)見習職工科三年 (2)補習科一年 (3)青年科五年	1,700 230 4,390	35 4 59	専任 46 兼任 48	吳海軍工廠

縣立吳第一中學校	下山手町	明治三十九年二月	五年	1,018	20	39	廣島縣
縣立吳夜間中學	縣立吳一中内	昭和十年四月	五年	250	5	26	兼任 全
縣立吳第二中學校	宮原通三丁目	大正十三年三月	五年	994	20	39	兼任 全
縣立吳高等女學校	東二河通	明治四十年三月	四年	1,026	19	30	兼任 全
吳市立工業學校	東畑町	昭和十四年三月	三年	54	3	6	吳市
吳市立高等女學校	公團通五丁目	大正九年五月	四年	823	11	16	兼任 全
吳市立	宮原通四丁目	大正十五年四月	二年	36	1	3	兼任 全
興文中等學校	平原町	大正十五年五月	五年	55	2	9	兼任 全
吳港中學校	長ノ木町	大正十五年八月	五年	53	2	2	宮川梓
吳商業學校	上山田町	昭和五年四月	五年	85	2	3	大正學園
土肥高等女學校	鹿川町	明治四十二年四月	五年	473	18	33	兼任 全
吳實科高等女學校	岩方通六丁目	大正十五年二月	四年	28	1	2	土肥女子學園
精華高等	岩方通八丁目	大正四年三月	四年	230	4	6	兼任 全
技藝女學校	岩方通八丁目	大正九年三月	四年	23	1	3	兼任 全
吳精華高等女學校	岩方通八丁目	大正九年三月	四年	63	3	3	兼任 全
土肥女子商業學校	鹿田町	昭和六年四月	四年	37	6	3	兼任 全

### 小學校

小學校教育は國民としての基礎的知徳を涵養する温床で、これが設備、教授、學校衛生等、理事者は一日たりとも研究努力を忽せに出来ない處である、吳市が例年市費の大半を教育費中小學校費に宛てゝゐるのも謂なきではない。

本市の小學校は明治五年學制頒布の結果、宮原（神原校）莊山田（荒神校）に各一校が設けられたとは云へ、所謂寺小屋の域を脱せず、學校の形態を整へたのは明治二十年以後、即ち鎮守府開廳の頃からであり、更に明治三十五年市制施行を機會に各校の統一整備を行ひ、高等小學校三、尋常小學校八を設置した、然し海軍の擴充に伴ふ市勢の膨脹は年次の臨機處置では收容の遑なく、學校の増設或は校舎の擴張改良は歳と共に進められ、現在單獨高等小學校三、尋常高等併置校六、尋常小學校一八校を數へてゐるが、限りなく伸張する本市の情勢は飽和の時を知らず、各種施設は日に月に改善擴充を要求せられて居り、本市教育界の前途も亦多難と云ふべきである、小學校現勢左の通り。

小學校一覽表

學校名	位置	創立年月	児童數	學級數	教員數	現校長
男子高等小學校	二河町	明治二十一年三月	一、一七	三	二	水野寅一
女子高等小學校	二河町	全	七九	三	七	藤原速夫
東高等小學校	東畑町	昭和十三年四月	一、五六	九	二	平賀逸司
神原尋常高等小學校	宮原通四丁目	明治五年六月	二、七三	四	五	稻垣正克
長迫全	長迫町	大正十四年三月	二、三三	三	三	寶澤三郎
港町全	海岸通五丁目	明治十二年七月	一、四七	二	二	笠岡一夫

阿賀尋常高等小學校	阿賀町	明治十年十月	二、三〇	三	四	和田正雄
鍋全	警固屋町	大正十二年五月	二、〇八	三	三	石田定一
吉浦全	吉浦町	明治六年六月	二、〇八	三	三	土肥金作
片山町尋常小學校	西片山町	大正十四年三月	一、五二	二	二	恩田三雄
東本通全	本通十丁目	明治三十五年四月	二、三九	三	三	櫻田正一
五番町全	二河町	明治三十六年四月	一、九三	三	三	伊達正一
二河全	東二河通六丁目	明治三十五年四月	一、五七	二	二	土井尊三
吾妻町全	吾妻町二丁目	明治三十六年四月	一、五三	二	二	池田保一
八幡通全	八幡通三丁目	明治三十六年四月	七三八	三	二	沖濱保一
荒神町全	荒神町	明治六年六月	一、三九	二	二	伊達玄一
岩方全	藏本通十丁目	明治四十年四月	一、四四	二	二	和泉一
兩城全	兩城町	明治四十一年四月	一、四七	二	二	和泉一
坪内全	宮原通十二丁目	明治四十四年四月	九〇四	二	二	中島太象
辰川全	東辰川町	明治四十四年七月	一、一五	二	二	佐藤真一
清水通全	清水通二丁目	明治二十三年八月	一、〇九	二	二	井上秀一
大入全	阿賀町大入	明治八年三月	二〇〇	六	二	金子兼一
延崎全	阿賀町延崎	昭和四年九月	四四七	九	七	原敏一郎
警固屋全	警固屋町	明治三十四年九月	四〇二	六	七	根山敏一郎
長郷全	警固屋町長郷	昭和七年十一月	二四四	七	九	森本雄四郎

落走全	吉浦町落走	明治四十四年四月	一三三	四	桑川一郎
上山川全	上山川町	昭和六年四月	八五九	一五	福井政之助
計			三、三五四	五七五	六五一

兒童卒業後の狀況

然して小學校の課程を了へた學童はどの方向に進んでゐるか、尋常科卒業兒童の九割九分迄が中等學校、或は高等小學校に進學してゐるのは都市的通用性と見做されるが、高等科卒業兒童で海軍工廠就職者が約半數を示してゐるのは本市の特殊都市であることを物語るものである。

小學校卒業兒童卒業後ノ狀況

種別	尋常小學校卒業者		高等小學校卒業者	
	女	男	女	男
中等學校入學者	四〇三	一	二五	一
高等實業學校入學者	七五九	一	一三九	一
高等其他小學校入學者	一、七〇二	一、三六	九三	二八五
海軍工廠就職者	一	一	六七	九
銀行、社會、商店職者	一	一	一五五	五九
徒弟ナリシ者	一	一	一五九	一八
家事ニ従事者	三〇	七五	一〇九	三五三
其他	二	五	一六二	一六七
計	二、三三五	二、二四	一、三四六	一、〇四四
青年學年入學者	一	一	四四	一九六

計	男	女
	四七	一
	八九	一
	二七	一
	一、七三	一、六〇二
	六七	九
	一五	六
	一五	九
	一三	四七
	一三	一七
	三、七二	三、三五八
	四四	一九六

實業補習教育

實業界に進出する有爲なる青年養成のため公立實業學校機關の創設は古くから要望されてゐるが、市財政關係其他より容易に之が實現を見ず、實業補習學校により僅かにその希望に應へてゐる現狀である。本市の補習教育機關は與望をうけて明治三十五年市立工業補習夜學校を創設した（大正十三年市立中學校—現縣立吳第二中學校—設立と共に廢校した）のに始まり、各種補習學校が創設され爾來幾變遷を経た現勢は左の通りである。

私立各種學校

學校名	所在地	創立年月	修業年限	生徒數	教員數	現校長
吳英語學校	藏本通九丁目	明治三十九年八月	三年	三五	三	中尾松之助
吳理容學校	今西通二丁目	大正十五年六月	一年	二六	一五	篤晴興
吳工學校	堺川通六丁目	昭和二年八月	三年	一六	六	西川清隆
吳軍港專修學校	藏本通六丁目	昭和四年三月	一年	七	三	宮内重太郎
吳工藝學校	今西通三丁目	昭和九年一月	三年	三五	七	椋川惠助
吳看護婦學校	神田町三丁目	大正十二年二月	二年	五	五	福場金司



吳産婆學校	神田町三丁目	昭和七年四月	專攻科 一年	三〇	五	福場金司
丸橋女學校	岩方通六丁目	大正十二年六月	研究科 一年	二九〇	二五	丸橋龜太郎
女子教員養成所	鹿田町	昭和七年九月	一年	二四	八	土肥モト
吳高等和洋裁縫女學校	公園通四丁目	昭和十一年四月	本科二年	八五	八	岩谷イタ
吳高等技藝女學校	岩方通三丁目	昭和十二年三月	速成科六ヶ月	一〇〇	三	戸島キク
吳洋裁女學校	岩方通六丁目	昭和十二年四月	研究科 三年	六	六	難波喜作

青年學校

大正十五年七月青年訓練所規程發令に基き市内七小學校に設置、青訓振興會或は後援會等の結成と相俟ち漸次充實擴張をなし、更に昭和十年四月青年學校規程公布と共に學則を變更、從來の女子補習學校及青年訓練所を青年學校と改編今日に及んでゐるが、海軍工廠従業員のためには廠内に特に青年學校が設置されてゐる。

男子青年學校

(公園通青年學校中△印ハ理髮部ヲ示ス)

學校名	所在地	創立年月	修業年限	生徒數	教員數	前年度卒業者	本年度入學者
吳市立神原青年學校	神原小學校内	大正十五年七月	本科五年 研究科一年	二六〇	七	一四	三三

吳市立長迫青年學校	長迫小學校内	大正十五年七月	本科五年	三〇二	七	二八	三〇一
岩方全	岩方全	全	全	三六八	七	三三	二六五
荒神町全	荒神町全	全	全	二四〇	八	三六	二四〇
兩城全	兩城全	全	全	三三三	六	三三	一六五
阿賀全	阿賀全	全	全	二八一	一〇	一九	二二七
警固屋全	鍋全	昭和四年四月	全	一五〇	六	一九	一六二
吉浦全	吉浦全	大正十五年七月	全	二四五	七	〇九	一一三
公園通全	男子高等全	昭和十年七月	全	二九九	八	〇八	一五八
本通全	東本通全	全	全	四八	△	△	△
清水通全	清水通全	昭和十三年七月	全	二六九	六	一三	二六九
計				三、二六七	八七	二〇四	二、一四一

女子青年學校

學校名	所在地	創立年月	修業年限	生徒數	教員數	前年度卒業者	本年度入學者
吳市立阿賀資料女子青年學校	阿賀小學校内	昭和六年四月	普通科二年 本科三年 研究科一年	一五五	二	五五	七四
全吉浦全	吉浦全	大正十一年四月	全	一五五	五	一〇三	四三
全警固屋全	警固屋全	明治四十四年四月	全	五九	四	三三	五九
全中央全	女子高等全	昭和十四年四月	全	一五三	五	一	一五三

幼稚園

本市に於ける幼稚園は明治二十三年八月私立淡水學校に併置せられた淡水幼稚園を以て嚆矢とする其後幾多の増設を見たが何れも私立經營にて小規模、或は短期間で廢園したものもあり、現在では左記八園が經營されてゐるが、各園特色ある園児の育英に努めてゐる。

幼稚園

園名	所在地	創立年月	修業年限	園児數	保姆數	園長
吳幼稚園	平原町	明治四十二年一月	三年	〇	三	欠員
善隣全	北迫町	大正五年三月	三年	六	二	中村金次
ルンビニ全	神田町九丁目	大正九年十月	三年	七	七	大友教雄
阿賀全	阿賀町	大正十三年九月	二年	四	二	宮内浩二
吳中央全	藏本通六丁目	昭和四年二月	三年	四	二	宮内重太郎
明星全	宮原通五丁目	昭和五年十月	二年	三	二	欠員
博愛全	吉浦町	大正十五年七月	二年	三	二	野間知覺
吳中央幼稚園	八幡通二丁目	昭和八年三月	三年	三	二	宮内重太郎

第七 社會教育

圖書館

市立圖書館設立に就ては早くより識者間に提唱されたが、大正十二年二万三千餘圓の指定寄附ありたるを機會に愈々實現の運となり、市費一万五千圓を加へ、大正十三年六月、二河公園内洋館建築物一棟（現圖書館）を買収して吳市圖書館と命名、大正十四年十一月から開館した、尙左記の通り市内四小學校内に簡易なる圖書館を經營、何れも熱心なる勉學者の好伴侶として次第に發達してゐる。

圖書館

館名	所在地	創立年月	建物坪數 (延坪)	圖書冊數	開館日數	閱覽者數	一日平均 閱覽者數	十四年度 經費豫算
吳市立圖書館	二河公園内	大正十三年七月	二、三六八	二、七六〇	二八八	一〇、一〇四	三、四九二	九、一七三
吳市吉浦圖書館	吉浦小學校内	大正十三年一月	三	六〇	二五	三、九七五	一一〇	五〇
吳市阿賀圖書館	阿賀小學校内	大正十一年七月	八	一、〇四八	二六四	一、九六三	七、五	五〇
吳市磐固屋圖書館	鍋小學校内	大正十三年十月	一七、五	六七	三〇	一、二六二	四〇	五〇
財團法人 和庄圖書館	東本通小學校内	大正十一年三月	五	七、五五	二八八	二七、七五	九六、〇	一、三四〇

青年團

現下の時局に對處する青年の使命重大なるを認識し、體力の練磨に精神修養に、或は社會奉仕に報國の念愈々燃え、時局に適したる施設の下に昭和日本建設に邁進し、國運の進展に専ら勵んでゐる、本市



に於ける青年團の現勢左の通り。

聯合青年團

團名	創立年月	加體團員數	經費	補助費		役員	事業
				市費	縣費		
吳市聯合青年團	大正八年三月	二、三、三三	二、四七五	一、五〇〇	二五〇	七	武道、相撲、詩吟講習會、徵夜講習會、青年修養講習會、修養座談會、道路掃除會、現役兵慰問、辯論大會、諸大會參加等
吳市聯合女子青年團	昭和五年七月	三、一、八三	二、七五五	一、五〇〇	二五〇	〇	家庭講習會、廢物利用ノ講習並展覽會、歡迎、研究ノ夕メノ見學遠足、軍隊ノ慰問、選舉肅正運動、諸大會ニ參加等

青年團

團名	區	域	創立年月	團員數	團長
第一青年團	宮原通方面		大正七年九月	一四〇	中下忠
第二青年團	清水通、八幡通、元町方面		大正九年二月	一一二	中崎義男
第三青年團	和庄通、登町方面		大正九年二月	一四二	妹尾喬
第四青年團	鹿田、長迫、吾妻町方面		大正十三年二月	一三三	林春雄
第五青年團	山田、同中央部、同北部方面		明治四十四年二月	二九二	宮崎俊太郎
第六青年團	郷町、片山町、古川町一帶ノ方面		大正九年二月	三〇〇	川村七郎

女子青年團

第七青年團	公園通、東二河、山手、三津田方面	大正九年四月	二二	細川清治
第八青年團	両城、川原石、港町方面	大正九年二月	二四	山崎泰一
第九青年團	吉浦町	明治四十二年九月	七五	青木鎮造
第十青年團	磐固屋町	大正六年四月	九五	杉野一夫
第十一青年團	阿賀町	大正四年七月	一〇六	濱崎光治

團名	區	域	創立年月	團員數	團長
神原女子青年團	神原小學校	區域	大正十一年一月	一三三	稻垣正克
長迫女子青年團	長迫小學校	區域	昭和四年一月	一〇六	寶澤三郎
港町女子青年團	港町小學校	區域	昭和四年五月	三三	笠岡一夫
阿賀女子青年團	阿賀小學校	區域	昭和四年十二月	三〇〇	和田正雄
鍋浦女子青年團	鍋浦小學校	區域	昭和二年四月	九〇	石田定一
吉浦女子青年團	吉浦小學校	區域	大正十一年二月	五五	土肥金作
片山女子青年團	片山町小學校	區域	昭和五年七月	五五	恩田三雄
東本通女子青年團	東本通小學校	區域	昭和五年三月	六〇	櫻田三薰
五番町女子青年團	五番町小學校	區域	昭和五年五月	六〇	伊達正一
二河女子青年團	二河小學校	區域	昭和五年四月	四〇	土井正三
吾妻町女子青年團	吾妻町小學校	區域	昭和五年六月	三〇	池田三勇



清水通尋常小學校 少年團	清水通校 區域	昭和九年四月	六〇	和子直
大入尋常小學校 少年團	大入校 區域	昭和九年七月	一八〇	金子兼一郎
警固屋尋常小學校 少年赤十字團	警固屋校 區域	昭和十年四月	三六〇	根山所一
落走尋常小學校 少年團	落走校 區域	昭和九年六月	九〇	桑田一
延崎尋常小學校 少年團	延崎校 區域	昭和九年六月	二〇〇	原敏郎

各種婦人団体

本市に於ける婦人會は大日本國防婦人會、愛國婦人會の各支部、分會が銃後奉公に修養訓練に目醒しい活動を續けてゐる外、婦人會聯合會の下に三十五団体があり夫々多數の會員を擁し、各特色ある活動をつづけてゐる。

聯合婦人會

會名	會員數	會長名	事務所
吳市婦人會聯合會	二四九六	水野ヒサオ	吳市役所教育課内

婦人會

會名	會員數	會長名	事務所
辰川愛憐婦人會	四五〇	勝田高子	辰川尋常小學校内

清水婦人會	五五六	佐々木宣子	清水通尋常小學校内
吉浦小學校母の會	五六〇	青木艶子	吉浦尋常高等小學校内
二河婦人會	一、一〇〇	宮川久代	二河尋常小學校内
中和婦人會	七〇〇	遠藤逸子	長迫尋常高等小學校内
五番町小學校母の會	一、一〇〇	三宅カツ子	五番町尋常小學校内
警固屋婦人會	二五〇	根山所一	警固屋尋常小學校内
坪ノ内婦人會	四〇〇	富松千代	坪ノ内尋常小學校内
岩方婦人會	六二七	兒玉春代	岩方尋常小學校内
山田婦人會	六四六	白井友代	上山田尋常小學校内
港町婦人會	五五〇	笠岡一夫	港町尋常高等小學校内
和庄婦人會	六五九	濱崎か子	東本通尋常小學校内
兩城婦人會	五五〇	佐々木眞子	兩城尋常小學校内
片山婦人會	九〇〇	布施福子	片山町尋常小學校内
八幡婦人會	三九五	仁井岡久代	八幡通尋常小學校内
荒神婦人會	四五六	澤原整	荒神町尋常小學校内
吾妻婦人會	三〇〇	三宅カ	吾妻町尋常小學校内
吳佛教婦人會	一、三〇〇	澤原整	吳市役所内 赤十字社支部内
吳婦人矯風會	七〇	十時菊子	下山手町二五軍人ホーム内
金光教吳眞道婦人會	一五三	中朝子	藏本通六丁目一〇金光教吳教會内

金光教吳東婦人會	五〇	原田直子	朝日町	金光教吳東教會所内
吳樹心佛教婦人會	三〇〇	辻村タカ子	藏本通九丁目	善法寺内
恭儉佛教婦人會	二九	上杉千代野	警固屋町	善妙寺内
堅德佛教婦人會	四五〇	佐々木稻子	岩方通六丁目	堅徳寺内
警固屋町鍋婦人會	九〇	藤原照子	警固屋町二五四	一ノ内
明圓寺吳佛教婦人會	三〇〇	遠藤逸子	本通十三丁目	明圓寺内
金光教和徳婦人會	八五	小笠原リヨ	登町一丁目	金光教和庄教會所内
吉浦佛教婦人會	三〇〇	細馬道子	吉浦町	誓光寺内
黒住教吳婦人會	六〇	大槻房子	茶町四	黒住教會所内
明西寺婦人會	一七〇	森谷ヒサコ	三城通六丁目	明西寺内
大谷派婦人法話會吳支部	一五〇	松下多賀子	公園通五丁目	本派本願寺説教所内
專徳婦人會	三〇〇	佐々木稻子	中通四丁目	專徳寺内
金光教神原婦人會	一五〇	小川ツル	宮原通四丁目	金光教神原教會所内
吳村雲婦人會	二〇〇	淺生イナ子	北迫町一	養運寺内
智恩佛教婦人會	一〇〇	藤原イツ子	宮原通十一丁目	日本願寺坪内説教所内

教育諸団体

教育の普及發達、社會風教の作興に貢献しつゝある本市教育諸団体は左記の通組織されそれ〴〵各機能發揮してゐる。

名	稱	事	業
吳市教育會		一、各種講演會及講習會開催 一、事業實施一、家庭教育及社會教育振興に關する事業實施 一、教育展覽會及小學校聯合音樂會開催 一、教育視察員の派遣 一、孝子節婦善行者表彰其他	一、教育紀念
吳市校長會		一、誕生會(今上陛下御成婚記念) 一、聯合運動會、聯合大音樂會(今上陛下御大禮記念) 一、河映記念樹表(皇太子殿下御降誕記念) 一、其他教育經營の研究、校外教護、虛弱兒童夏季保養所經營 一、研究集録刊行等	一、其他教育
吳市教員會		一、教育教授の研究調査並教員の修養に關する事業 一、話般の事業 一、教員の保健に關する事業 一、教權確立に關する事業 一、其他教育の普及徹底に必要な事業	一、其他教育
教育後援會		一、學童の衛生施設 一、學校看護婦設置 一、御眞影奉置所及講堂の建築	一、貧困兒童の救助

公民講座

國民の社會に對する的確なる理解、正鵠なる判斷力を養成する公民教育は大正十二年大阪市に成人教育講座を開講したのに始まり、翌十三年度吳、神戸、横濱、名古屋、福岡の各都市に實施したが、本市は大官業工場を有し且つ市民の自覺も強く多數の聽講者を得て全國第一の成績を擧げてゐる。

名稱	創立	修業期間	科目	日	講師數	聽講生數	前年度修了者數	修了者數	計者	本年度經費
吳市公民講座	大正三十三年六月	六月ケ	日支事變ノ今後ノ諸問題 時局ト國民經濟ノ醫學知識 日本精神ノ揚ノ根本問題 宗教講座、文藝講座	一〇	一、二〇八	四六〇	一一、七二六	二〇	八三	五、二五四圓
普通學部	大正三十三年六月	一年ケ	初等英語代數漢文 幾何國語 日本歴史國語	一	一	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

# 第八 社會事業

## 窮民救護

昭和七年から實施せられた救護法及母子保護法に依る昭和十三年度末現在の狀況は左の通りである  
(豫算は昭和十四年度當初豫算)

### 救護法ニ依ル救濟狀況

救護ノ種類	前年	越	救護開始	同廢止	死	亡	年末現在員
生活扶助	二一九		六〇	一八		三三	二二八
醫療扶助	(一一)		(七二)	(二八)			(一三)
助産							
計	二二二		八七	四四		三三	二四一

### 救護費豫算

- 一、生活扶助費 一三、五〇六圓
- 二、醫療費 一、八七七圓
- 三、助産費 一三圓
- 四、生業扶助費 三〇圓
- 五、埋火葬費 三〇〇圓
- 六、委員費 一六三〇圓

### 母子保護法ニ依ル救護狀況

救護ノ種類	前年	越	救護開始	同廢止	死	亡	年末現在員
生活扶助			八〇	一三		一	六七
醫療扶助							
計			八〇	一三		一	六七

生活扶助	養育扶助	醫療扶助	計
一四	六六	八〇	一五〇
三	九	一三	一五
一〇	五七	六七	一二四

### 母子保護費豫算

- 一、生活扶助費 五四九圓
- 二、養育扶助費 三、一三〇圓
- 三、醫療費 二五三圓
- 四、生業扶助費 三〇圓
- 五、埋火葬費 五〇圓
- 六、委員費 三二六圓

### 方面委員

本市では聯合方面委員會の下に市内を十一方面に分け、其の地區の事情に精通し人格ある篤志家百六十名を委員に委嘱してゐる。方面委員は相互扶助、隣保等方面委員會の主旨のもとに常に区内居住者の生活状態、特に下層階級者の生活状態を調査しその保護指導に當り、或は各社會施設と緊密なる連絡をもつてその機能を發揮してゐるが、現下時局に際しては軍事援護の第一線に活躍し、軍事扶助法の取扱其他軍人遺家族の保護、慰藉に務むる等一般市民のよき相談相手となり福祉増進に又銑後援後に完璧を期してゐる、その主なる事業左の通り

- 1. 社會調査
  - 2. 相談指導
  - 3. 生活保護
  - 4. 兒童保護
  - 5. 救療保護
  - 6. 戶籍整理
  - 7. 金品給與
  - 8. 融和親善
  - 9. 社會教化
  - 10. 其他
- 診療事業ニ關スル事項

診療別	診療方法	受診場所	取扱別
無料診療	一、救護法ニ依ル診療 二、軍事扶助法ニ依ル診療 三、済生會診療券 四、恩賜財團 済生會吳病院 五、出征應召軍人遺家族診療券 六、出征軍人軍屬家族投薬券	地方醫又ハ病院 全 全上 病院 地方醫又ハ病院 吳市開業藥劑師會 吳市開業藥劑師會	本人ノ申告又ハ方面委員ノ取扱ニ依ル 全 方面委員ノ取扱ニ依ル 全 町總代又ハ方面委員ノ紹介ニ依ル
實費診療	一、廣島縣社會事業協會診療所 二、出征軍人軍屬遺家族優待券	全上診療所 (済生會吳病院内) 吳市開業藥劑師及 齒科 醫師及 醫師	方面委員ノ紹介ニヨル 町總代又ハ方面委員ノ紹介ニ依ル

職業紹介事業

本市の職業紹介所は大正十一年九月社會課に於て事務を開始、更に現在の公園通一丁目事務室を獨立し専ら職業の紹介斡旋に當り、更に毎年校門を巢立つ少年少女の職業輔導、紹介斡旋も併せ行ひ、關西屈指の成績を擧げてゐたが、昭和十三年七月一日より同紹介所は國營となり、厚生省に移管勞働紹介所も併置して事業を續けてゐる、同年六月末日迄の成績左の通り

職業紹介取扱件數

(自昭和十三年一月至全 六月)

業應別	取扱別		計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
	求	職者										
工業及鐵業	求	職者	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
土木建築業	求	職者	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
商業	求	職者	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
農林業	求	職者	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
水産業	求	職者	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
通信運輸業	求	職者	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
戶内使用人業	求	職者	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
雜計	求	職者	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計

年別取扱成績表

年別	求人		計	求職者		計	就職者		計
	男	女		男	女		男	女	
大正十一年	二、六三一	一、五六四	四、一九七	五七三	二六四	八三七	二八	一〇五	三三
大正十二年	二、二四一	五九四	二、七九〇	一、〇三四	二二三	一、二四七	四二	二二	四四
大正十三年	四、〇九九	一、七九三	五、八九二	三、五五一	一、〇一一	四、五六二	一、五九二	五七二	二、二二三
大正十四年	二、六二七	一、六二四	四、二五一	三、〇七九	一、二六七	四、三四六	一、一五六	七〇三	一、八五九
大正十五年	二、六八九	二、〇〇三	四、六九二	三、〇九六	一、五九七	四、六九三	九八五	八三七	一、八三三
昭和二年	二、五八一	二、〇九〇	四、六七一	二、六二五	一、六九〇	四、〇三五	一、七七五	一、四〇六	三、一八一
昭和三年	二、一六〇	一、七七八	三、九三八	二、〇一〇	一、三九二	三、四〇二	七三二	七五	一、四五六



所在地	敷地總坪數	延建坪	竣功年月日	戶數
北 迫 町	一二〇坪	七三坪二五	大正十一年二月二日	三戶
内 神 町	一、七三一坪八五	七〇八坪七五	全 一、一、七、二一	四〇戶
宮原通十二丁目	五九〇坪	一六八坪	全 一、一、七、二二	二一戶
海岸通七丁目	五五八坪九九	三〇九坪	全 一、一、一〇、九	二八戶

住宅組合

住宅問題は都市生活者一殊に中産階級以下の者にとつては最も痛切な問題である、茲に鑑み政府は公共団体の公營住宅建設奨励を圖ると共に、大正十年住宅組合法を發布し低利資金の融通を圖ることになつたので本市に於ても之が斡旋をなしたる結果現在に於ける組合數は六十四組合、組合員數は約六百名借入金は八十三万五千餘圓に及んでゐる。

公設市場

曩の歐洲大戰により醸し出された經濟界の變動は大正七年愈々その頂上に達し、諸物價の奔騰はその止まる處を知らぬ状態に立至つた、本市は之が物價抑制、人心の不安一掃を期して大正九年市内松本町に公設市場を設置し、指定商人に依り日用必需品の小賣を開始、その好成績に鑑み更に神原、海岸通にも増設以て逼迫せる世情に對處した結果、人心の動搖も次第に薄らぎ、時勢の推移は自覺せる一般商人に依る私設市場の經營が最も合理的と認めらるゝに至つたので昭和三年乃至同六年各公設市場を廢止したが、區民の要望に應じ警固屋町のみには昭和五年六月市場を設置今日に及んでゐる。

警固屋公設市場年別賣上高

年 別	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
賣上高	九、六〇	一、一〇五	八、五二	八、四〇六	一〇、六六六	一三、八九四	二〇、九二〇	一〇、一四七	二五、二九二

市民館の活動

隣保相扶、勤勞自助の精神涵養、生活の向上を圖る隣保事業施設は豫ねてから方面委員吳聯盟に依り提唱されてゐたが、昭和十二年九月遂に吳市民館を設立した、同館の事業としては

- 一、職業補導に關する事項
- 二、保育に關する事項
- 三、精神生活向上に關する事項
- 四、身上相談に關する事項
- 五、偕和協調に關する事項

等で、職業補導に關しては和洋裁縫設備を以て之に宛て、保育事業は本館保育園外三保育園を設置して生活戦線に活躍する家庭の幼兒を保育し別に妊婦に對する保護等總ゆる角度から保護を加へ、精神講話洗濯、茶華道、作法等講習會も随時開講して精神生活向上確立を圖り、或は結婚紹介、身上相談等常に市民のよき相談相手となり、指導機關として全機能を發揮してゐる、昭和十三年度の成績左の通り

職業補導事業に關する事項



種別	年末在籍數	出席數	入館數	退館數	作業日數	一日平均出席數	本年支拂工賃
洋裁部職習生	三	九、〇七九	九〇	八〇	二九五	三〇	五、六〇三・六七
和裁部職習生	三〇	七、六九七	九三	七四	二九五	二六	一、八五〇・四
計	六	一六、七七六	一八三	一五四	五九〇	五六	七、四七〇・八一

保育事業

種別	年末在籍數		出席數		入園數		退園數		保育日數	一日平均出席數	年末給食園兒數
	男	女	男	女	男	女	男	女			
本館保育園	三三	六一	七、三〇〇	五、七六三	二、九九三	八三	一三九	八五	七三	二九八	三三
阿賀保育園	三〇	五五	五、七九	六、六四九	一、二四八	四七	五	三七	四	二九九	三
吉浦保育園	四〇	六五	六、四九	八、〇三四	一、四四三	七〇	一〇五	七二	八〇	四一五	三
川原石保育園	三三	六一	三、〇三三	三、二四五	六、二九八	四七	九三	七二	二三四	四八〇	一
計	一三〇	二四五	三三、四九一	四一、六九〇	一〇、四一八	二四六	二九九	一九四	一九九	一、〇三三	七

結婚相談事業

申込者數	解消數	現在數
男 一四三	男 六〇	男 八二
女 二九	女 五	女 五
計 一七二	計 六五	計 八七

精神生活向上事業

種別	年末現在數	出席數	講習回数數	一日平均出席數
精神講話	三〇	二、一九五	二	一〇四・五
作法茶道	四	七五	四	一七・八
華道	四	一、一五四	四	二六・二
計	七四	四、一三四	一〇	一四八・五

其他の社會事業

昭和九年十月實施せられた少年救護法により本市にも十五名の少年救護委員を囑託、少年の不良化防止、不良少年の救護善導等社會淨化の重大使命を果しつつあるが、更に吳市少年救護協會も設立され廣く社會人と協力して本事業の目的達成に努力してゐる。

其他社會事業施設

名稱	所在地	創立年月	經費	職員其他	事業
恩賜財團 濟生會吳病院	吳市西二河通 二丁目十一番地	昭和五年一月十日	三七、三二	院長醫師 醫師調劑師 事務員 看護婦 使丁	內科 外科 產婦人科

財團法人 帝國海軍軍人 會	吳保樹德會	吳保護會	吳施泊所	吳救護院	吳保生院
下山手町	古川町	岩方通六丁目	公園通五丁目	清水通三丁目	阿賀町
明治 四十一年一月	大正三年五月	大正四年一月	大正七年二月	明治 三十六年五月	昭和八年六月
					六、六九
代表者 十時菊子 評議員 一五五 事務員	代表者 秦野健二 主事 一〇 視察員	代表者 滿田惠順 監事 一 講事 一 事務員	代表者 瀨尾靜政 事務員	代表者 島田源太郎 事務員 二一 貼務員 二	醫院師長 若千一 事務員 三 看護員
1. 簡易宿泊 2. 信仰精神涵養 3. 保護事業	1. 貧困者保護感化 2. 各種救濟事業	1. 不具者ノ善導保護 2. 信仰精神涵養 3. 其他保護事業	1. 貧困者宿泊保護 2. 其ノ他	1. 精神病者ノ監置善導 2. 行路病人救濟 3. 其ノ他	1. 老幼者不具疾病癡疾者收容救護 2. 精神修養慰安講演 3. 講話會

吳同濟義會		社團法人 吳同濟義會	廣島縣社會事業 協會診療所
社會館	四恩會館	岩方通五丁目六 吳市役所內	濟生會吳病院 內併置
本通三丁目	中山手町	大正十年 六月十六日	昭和六年六月
大正十四年四月	大正十一年一月		
三、三六		三、三四	三、四〇〇
食堂經營 岡野善右衛門 事務員 二 使丁 一	保助 二 囑託 一	會務員 一 監事 一 顧問 一 評議員 七 事務員 一 保助 一 囑託 一	所長(兼) 醫師 一 藥劑師 一 事務員 三 看護員 二
1. 簡易食堂 2. 全宿泊(貧困) 3. 無料宿泊 4. 勞働紹介 5. 思想善導 6. 人事相談	1. 託兒事業 2. 女子縫製教育 3. 小學生ノ補助教育 4. 助産取扱 5. 理髮 6. 人事相談 7. 其他	1. 防貧救濟 2. 貧民救濟 3. 教化事業 4. 兒童保護 5. 小學校欠食兒童給食 6. 市內各種社會事業 7. 地方改善事業	內科 外科 產婦人科

吳海兵寮	登町一丁目	大正十一年二月	代表者 辻村タカ 理事 母一〇 事務員	1. 軍人ニ信仰精神涵養 2. 全家族的慰安
南林寺托兒所	海岸通一丁目 十一番地	昭和十三年十月	代表者 瀧本小宥子 保母 大橋強一	托兒
兩城保育園	川原石町二四	昭和十三年九月	保母 大橋強一	托兒

### 國防協會の組織

本會は明治三十七年干城會と稱して創立、昭和七年一月十五日對支時局後援會と改稱更に昭和八年九月三十日吳市國防協會と改めたが昭和十二年七月、今次支那事變勃發するや本事變の重大性に鑑み、會の内容を擴充強化するため市内四十五公共團體の一致團結を以て吳市國防協會と改稱組織を遂げ、事業豫算三十萬圓は市民有志の寄附に仰いだが忽ち全額寄附が成つて、吳市民の強い銃後赤誠を顯示した、同協會では國防精神の涵養、恤兵犒軍、出征軍人遺家族の慰藉、保護等同會目的の銃後支援事業遂行に全機能を發揮してゐる、同會組織及目的事業の概要左の通り。

#### (一) 組織

本會の趣旨に賛成する者吳市及市内各種團體四十一團體を以て組織す

#### (二) 目的

國防精神の涵養、恤兵犒軍、出征軍人遺家族の慰藉保護並に銃後の支援

### (三) 本會事業の概要

#### (1) 恤兵犒軍

△出征軍人に對する餞別贈呈 △歡送迎事務所設置 △出動部隊慰問 △皇軍慰問狀の發送及慰問袋の贈呈  
△在院戰傷病軍人慰問見舞

#### (2) 出征軍人遺族留守家族の慰藉保護

△出征軍人家庭慰問並に見舞金贈呈及慰問狀發送 △出征軍人家族中生活困難なる家庭に見舞金贈呈

#### (3) 防毒具の整備

防毒具を購入し各防護分團に配給し其の普及整備を計る

#### (4) 國防精神の涵養に關する事業

イ、忠魂加護祈念式舉行 ロ、銃後支援市民大會開催 ハ、其他國防精神の涵養施設

#### (5) 其他銃後の支援に關する事業

イ、戦死者に香奠贈供 ロ、遺骨供花 ハ、合同葬執行 ニ、其他銃護支援に關し臨機必要な事業

## 第九 交通運輸

### 鐵道

山陽本線海田市驛から吳市に至る二十軒の舊吳線は明治三十六年十二月開通、從來の鐵道はこの一線に限られてゐたが、昭和十年十一月二十四日山陽本線三原驛から瀬戸内海沿岸を縫ふ六十七軒の新生吳線は吳市民をはじめ沿線町村民歡呼のうちに開通、茲に吳市の陸上交通は東西に開けるに至つた、本線

の優秀線なることは我國鐵道支線中でも白眉とされ、複線、電化計劃等も策されて居り之が實現も遠からざるものと期待されてゐる。

吳 驛

年次	種別	乗車人員		降車人員		發貨		到貨	
		客	員	客	員	送	到	送	到
昭和十一年		二、四六、八二六		二、五三、五八八		九、六九〇		五八、八五九	
全 十一年		二、九六、三八一		二、九二、五五五		二九、二四		九八、二四三	
全 十二年		三、四九、七〇〇		三、四〇、五一六		五三、九五七		一四九、三二	
全 十三年		三、九八、一〇四		三、九四、九九八		七九、七六〇		二〇二、三三八	

吉 浦 驛

年次	種別	乗車人員		降車人員		發貨		到貨	
		客	員	客	員	送	到	送	到
昭和十一年		七、八、八三九		七、九、六二九		七、八二九		一〇、二〇三	
全 十一年		九、九、二五六		九、九、一五六		四六、三七六		八、六九六	
全 十二年		一、〇八、八二三		一、〇三、二九七		六〇、九六四		一一、〇〇七	
全 十三年		一、四六、四九三		一、四八、七四七		七、二八四		二二、六一	

阿 賀 驛

年次	種別	乗車人員		降車人員		發貨		到貨	
		客	員	客	員	送	到	送	到
昭和十一年		二、九二、八〇三		二、七四、八七		一、三三八		九二	
全 十一年		三、八〇、七三四		三、六八、一四六		二、〇三		一、〇八一	
全 十二年		四、六三、九三		四、四九、五八五		二、三三		一、一六六	
全 十三年		五、九、五七		五、二、九三四		二、九三〇		二、二〇二	

海 運

江田、能美、倉橋島等島嶼部との間には吳港を起点とする巡航船が間斷なく出入してゐる外、生鮮魚野菜其他食料品も大部分を海路により移入してゐる本市の海運は殷盛を極めてゐる、殊に阪神或は關門九洲、朝鮮方面との取引激増に伴ふ移出入も年々その數を増してゐる。

年次	種別	移出額		移入額	
		額	額	額	額
明治三十五年		八、〇〇〇		一、三五二、九四九	
全 四十四年		四、〇〇〇		三、九九八、一〇六	
全 四十五年		二、〇、七三四		二、五三、〇八九	
大 正 五 年		五九七、〇七三		二、二五、九三〇	
全 十 年		四、三、七、五八〇		七、三九六、八六一	
全 十 五 年		三、九、五、五四七		一、四、〇、六一、一八〇	
全 十 六 年		八、四、六、一、〇八五		二、六、七、〇、九七五	
全 十 七 年				四、七、八、二、四、一三	

昭和十三年	昭和十二年
全	全
一五、九四〇、六〇四	一五、九四〇、六〇四
二、七四五、五六九	二、七四五、五六九
六五、二七〇、〇八一	六五、二七〇、〇八一
六、一七三、八八八	六、一七三、八八八

吳 港

年次	乗船人員	乗降	上陸人員	客	發貨	送	到	物	着
昭和十一年	六〇三、七五八		六八、六七六	七、一六三、六六四	七、一六三、六六四			四三、三四〇、六七四	
全十一年	四六五、四三三		四八七、一五五	七、一八九、八七九	七、一八九、八七九			四三、六四八、九六九	
全十二年	五一、九六四		五五、八七一	一四、二七〇、〇一六	一四、二七〇、〇一六			六〇、一七三、四三九	
全十三年	五三、八七三		五五、四八六	一〇、七七七、七三四	一〇、七七七、七三四			六〇、四八六、五七三	

阿 賀 港

年次	乗船人員	乗降	上陸人員	客	發貨	送	到	物	着
昭和十一年	六六、八九一		六四、六五七	一、二五七、五六一	一、二五七、五六一			四、〇一三、六〇〇	
全十一年	四五、七五五		四三、四九九	一、二七一、二〇六	一、二七一、二〇六			四、一七五、一六五	
全十二年	五〇、二八七		四七、七七二	一、六七〇、五八八	一、六七〇、五八八			五、〇四三、六四一	
全十三年	一一、七五四		九、八八八	一、九八七、八四五	一、九八七、八四五			五、六六七、三二一	

備考 乗降船客ノ激減ハ阿賀海岸通ヨリ阿賀港迄ノ自動車線ノ中止ト一部寄港船舶ノ廢止ニヨルモノナリ

入 港 船 舶 表

港 別	年 次	汽 船	機 帆 船	帆 船	計
吳 港	昭和十一年	二四、二四九	一七、七〇九	一一、四〇〇	五三、三五八
	全十一年	二三、八五四	一七、二四九	一一、九九〇	五三、〇九三
	全十二年	二四、三三〇	一七、八二二	一一、三六六	五三、五一七
	全十三年	二四、三五八	一七、八二二	一一、四九九	五三、五九一
阿 賀 港	昭和十一年	一〇、九一三	一一、二四三	四、四二七	二七、五八三
	全十一年	一〇、七七七	一一、〇一六	四、三九六	二七、一八九
	全十二年	一〇、九七三	一一、一九九	四、四九七	二七、六六八
	全十三年	九、〇八七	一一、二八二	四、五一六	二五、八八五

年 次	日 本 型		西 洋 型		其 他	
	發 動 機 有 ス ル モ ノ	發 動 機 有 セ ザ ル モ ノ	補 助 機 有 ス ル モ ノ	補 助 機 有 セ ザ ル モ ノ	汽 船	發 動 機 有 ス ル モ ノ
昭和十一年	三六六	一〇七	一〇七	六	三三	三三
全十一年	三七九	一〇七	一〇七	六	四五	二六
全十二年	三七九	一〇六	一〇六	六	四五	二六
全十三年	三七九	一〇六	一〇六	六	四五	二四

種別	年次			
	昭和十三年	昭和十二年	昭和十一年	昭和十年
荷積馬車	一七〇	一八四	一八九	
人力車	三	三	二六	
荷車	九、七五二	九、七四二	九、二九六	
中車	四六	四五	四五	
自動自轉車	一九五	一九七	一七三	
其他	四一五	四一〇	四一〇	
無稅市	七〇六	七六	六六八	

### 第十 産 業

#### 吳の産業概観

その昔、寥々たる農漁村であつた吳浦も、軍港設置と共に移住者相次で戸口を激増し、土着人も亦従来の農、漁生活を棄て、商家に轉出、或は官營工場に入る等明治十九年を契機に本市の形態は一變した、爾來軍港の擴充、交通運輸の發達は本市商工業界を發展に導いたが、特に藝南地方樞要な地域にあ

關係上早くから物資集散の地歩を占め、偉大なる本市消費力と共に年額約一億圓の商貨を吞吐してゐる。

市内商工業狀況は別項に見る如くであるが、各商工業機關の活躍と市民の自覺は、從來の氣風を一掃して企業熱旺盛となり、各種工場の簇立相次ぐ好況を呼び生産の吳への急歩調を續けてゐる。

#### 生産品に見る推移

文化年度の國郡誌に因ると吳浦の産物は唐黍、黍、琉球芋、蕎麥、楮、綿、麻芋、檀、蒞柿等の農産物、素麵、麥菓子、飴、蠟燭、髮油等の加工品、鱒、煎海鼠、煎鱒、淺利貝、蛤、貝類等の水産物のほか農間副業として藁綱、繩、草鞋、索綱等が示されてゐるが、更に婦女子の手内職として網糸、繩練、編網等が擧げられてゐる、之等の産業は明治初年頃迄續けられてゐたが、軍港の設置は各方面からの移住者を激増し吳三千石と稱された農耕地も忽ち連擔櫛比の新市街と代り、舊來の産物はその殆んどを絶滅して、僅かに蔬菜の栽培、網綱等の漁業がその片鱗を示すに過ぎず、それ迄は農漁業に携つてゐた人々も多くは海軍職工、或は商家に轉出して軍港設置を劃期に本市産業界も一大變革を示し、新時代の要求に應じて酒、醬油、酢、味噌等の醸造業、豆腐、蒟蒻、蒲鉾、菓餅、菓子類、清涼飲料水等の日用食料品、金ペン、鐵ペン、萬年筆、畫紙、ゴム靴、ゴム製品、石鹼、砥石、製針、皮革製品、罐詰、炭炭、被服等近代色豊かな化學的製産が勃興し、更に支那事變起るや如上の平和産業中には軍需工業等に轉出するもの多く各種工場も相次いで設立せられ、一時衰微を辿つた農水産物も亦それ／＼有力なる指導機關を得て收穫の増大に或は現代嗜好に向つて加工改良が加へられる等舊態一變の時代を招來するに至り、今や生産額も舊に倍するものがあり、その販路も日に月に拓けて輸出品も相當額に上つてゐる。

各種生産額

農畜工水鐵林 産産産産産 物物物物物	市制當時	昭和十年	十一年	十二年
	明治三十五年			
農産物	一六八、八〇三	五九、五四七	五六四、〇〇〇	六九、〇二五
畜産物	七三、九四〇	七三、一〇四	七三、〇〇〇	九一、七七七
工業産物	五九、一六三	一四、七〇、一〇一	一五、二〇、〇〇〇	一七、三九八、二二六
水産物	一四、九六四	五二六、五八二	五四六、〇〇〇	五七七、七〇三
鐵産物	—	三三、八四〇	三六、〇〇〇	三八、二五〇
林産物	—	四、八二一	四、〇〇〇	四、一九六
計	三二五、八六九	一六、五八、〇八五	一七、〇八三、〇〇〇	一九、五七三、〇六七

工業の吳

本市工業界の發展は地勢的關係から長らく閉され、自給自足の生活が久しく續けられたが、交通機關の發達、軍港の擴充は市民の自覺と相俟つて近來工業界の進展見るべきものあり、企業熱も旺盛で逐年工場を激増し、生産品も時代に適應して種々變遷する等伸びゆく吳市の一端をうかがふことが出来る、主要生産品は全國第一位の金ペンをはじめ、金屬工業品に多く見られるが、清酒醬油等の醸造もまた年々その産額を増し、各種加工業また隆昌を示してゐるが、近時急速の發展を示す重工業方面も頗亦る期待されてゐる。

各種主要生産品

欠

**MISSING**



各種工場

工場名	所在地	創設	業
三宅酒類醸造場	本通十四丁目四二	安政三年	十一月
遠藤酒類醸造場	本通十二丁目四九	明治十二年	十一月
河又酒造場	下山手町六七	大正六年	十一月
中野酒造場	吉浦町四、一〇二	明治三十四年	十一月
脇酒類醸造場	阿賀町一、九六七	全三十九年	八月
山本酒造場	全五、八二〇	全六十年	十二月
佐藤酒造場	藏本通十四丁目二〇	全四十四年	十一月
引地酒造場	吉浦町四、一九二	全三十五年	三月
宮崎酒造場	下長木ノ町四〇	全六十五年	五月
石橋酒造場	泉場町十二番地	全三十九年	九月
高橋酒造場	本通十四丁目六十三番地	全三十九年	六月
土井酒造場	阿賀町一、七五一	昭和三年	十一月
和中酒造場	稻荷町二八	明治四年	二月
水野酒造場	警固屋町三、〇九九	嘉永元年	八月
水野酒造場	全二、五八一	明治四年	十一月
片岡酒造場	海岸通四丁目三九	全三十八年	十一月
吳替油株式会社	古川町一、六一九	全三十九年	四月

金川	醬油	醸造工場	西二河通七丁目一三	明治	四十年	十一月
丸三	商會	工場	吉浦町二一五五	昭和	二十年	十一月
大島	豆腐	製造場	岩方通七丁目四	大正	七年	十一月
森川	豆腐	製造場	古川町五三	全	十一年	四月
◎清涼	飲料	製造所	下中町三二	全	十九年	六月
元岡	ラム	製造工場	阿賀町四四九七	明	九年	四月
味福	榮養	食品研究所	西本通七丁目十二番地	全	十九年	四月
松永	創製	製造工場	海岸通二丁目五〇	昭	八年	十一月
本佐	仁市	商店	海岸通二丁目七六	大	四年	十一月
野間	製菓	工場	神田町六丁目七	大	四年	十一月
山本	製菓	工場	岩方通八丁目八	全	五年	十一月
松	鶴	會堂	本通十一丁目二	全	六年	十一月
大	林	商會	岩方通十二丁目	大	四年	十一月
長尾	精米	所	今西通二丁目二	大	四年	十一月
日本	水産	株式會社	公團通一丁目一	昭	九年	五月
第一	吳製	株式會社	海岸通四丁目六九	大	五年	五月
河内	商會	製氷冷蔵工場	西本通一丁目一〇	全	八年	五月
小林	茂商	商店	本通三丁目五	全	八年	五月
元	市	商店	松本町六	大	九年	五月

健本	澱粉	製造工場	阿賀町七八一八	大	七年	四月
合名	會社	吳織詰工業所	海岸通二丁目七八	昭	八年	四月
高須	織詰	合資會社	西二河通三丁目五	明	九年	四月
吳牛	乳商	業組合	濱田町九丁目四	昭	十年	六月
株式	會社	セーラー万年筆	全十丁目七	明	十四年	二月
工業	立國	丸中工場	岩方通六丁目一七	大	五年	二月
帝國	金	株式會社	今西通九丁目一三	全	七年	二月
福屋	金	株式會社	海岸通一丁目一七	全	九年	八月
日東	金	株式會社	今西通六丁目六	全	二年	八月
合資	會社	中央金	三城通八丁目一八	全	二年	八月
佐々	木	金	八幡通二丁目二四	全	八年	四月
萬國	金	株式會社	胡町二五	昭	四年	四月
山本	金	株式會社	藏本通六丁目二	大	六年	四月
朝日	金	株式會社	今西通二丁目五	昭	六年	一月
友	澤	眞工	寺西町一二	全	四年	一月
野村	萬年	筆製作所	堺川通五丁目六	全	五年	一月
坪下	金	株式會社	荒神町六一	全	九年	一月
山陽	金	株式會社	公園通三丁目一〇	大	九年	一月
ウイ	ナス	株式會社	三城通五丁目一〇	昭	四年	一月



中山造船所	淺海鑄工場	每本鐵工所	田中鐵工所	向井鐵工所	林鐵工所	株式會社 守安ドリル製作所	極東鑄造合資會社	楠本鑄造會社	佃鐵絞轆製作所	豊田鐵工所	丸二製鋼所	吳製鐵所	橋本製鐵所	河内商會 部分品製造工場	河內商會 第二工場	株式會社 吳鐵工所	合資會社 東歸工業所	臨本鐵工所
警固屋町十一丁目	公園通一丁目二	中通一丁目一六	吉浦町二〇五四	藏本通二丁目二番地	今西通九丁目一	東二河通二丁目一	上山手町一六	公園通二丁目五	神田町七丁目一六	濱田町六丁目一	吉浦町二一五五	海岸通七丁目五	西二河通八丁目一	公園通二丁目二	西二河通一丁目九	吉浦町新地乙四一九八	今西通四丁目一	海岸通一丁目二四
昭和	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正
三十九年	三十二年	三十二年	三十二年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年	三十五年
八月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月

極東鐵ペン製作所	東洋クロームペン製作所	古川鐵ペン製造所	川原鐵ペン製造工場	株式會社 セイライ万年筆 阪田製作所 インキ工場	玉光	田口機械工務所	アサ諸金屬製工所	横山化學工業所	藤岡クリップ製造所	三田製針所	小口商店 吳製作所	合資會社 末永製針所	村上製眞所	瀬山製作所	飯野商事株式會社 吳支店造船部	山口造船所	清水造船所	合資會社 吉浦造船所
岩方通十二丁目二〇	二河通六丁目一二	東二河通一丁目一	西本通八丁目六	岩方通四丁目一五	岩方通十三丁目一番地	西二河通六丁目四	濱田町八丁目一三	西辰川町三番地	今西通九丁目五	阿賀町小倉新開	西辰川町一五一	明神町八	元町五三	今西通十二丁目一	吉浦町東新町三四	吉浦二五一六	警固屋町一二一七	吉浦町二五一
昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年	三十九年
八月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月	三月

永井印刷所	吳製砥所吉浦工場	吳製砥所	共和クローム鍍金工場	米光鍍金工場	相原自動車修理工場	小田自動車修理工場	共榮社	株式會社沿岸タクシ	株式會社自動車修理工場	株式會社電車部修理工場	株式會社電車部修理工場	松浦瓦斯熔接工場	細本鐵工所	青砥鐵工所	小川鐵工所	新宮鐵工所	八倉鐵工所	上田鐵工所
本通五丁目十五番地	吉浦町中綱氏二〇九〇	岩方通二丁目十番地	西本通三丁目三番地	海岸通四丁目五番地	西二河通一丁目五ノ一	公園通一丁目二番地	中通二丁目二四	海岸通三丁目六五	今西通一丁目六	阿賀町小倉新開	上山手町五〇番地	吉浦町東新開西ノ割	吉浦東町九二	今西通九丁目五	朝日町三	岩方通二丁目六	今西通四丁目五	今西通四丁目五
大正	昭和	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正
十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年	十二年
三月	八月	九月	十一月	七月	六月	四月	十月	四月	四月	二月	五月	十一月	七月	七月	七月	七月	七月	七月

西林鐵工所	中本機械研究所	角鐵工所	合名會社水野組工作所	矢田邊鐵工所	西田鐵工所	住吉鐵工所	野島鐵工所	吳發動機製作所	下本鐵工所	原田機械工具製作所	佐々木鐵工所	宮中機械工作所	神田鐵工所	奧原鐵工所	的場銅工場	吳機械工具製作所	吳製鐵工業所	山口鐵工所
全十一丁目	警固屋町九丁目六三	全十丁目四九	警固屋町三九四〇	今西通六丁目五	岩方通九丁目一	阿賀町三五五一	下中町三八	海岸通一丁目四六	吉浦町二九	海岸通一丁目四三	阿賀町三五四二	西本通四丁目七	海岸通四丁目五六	阿賀町四九一二	堺川通三丁目二	海岸通一丁目四三	明神町四	海岸通一丁目四六
全	全	全	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大
八年	九年	九年	十年	十年	十年	十年	十年	十年	十年	十年	十年	十年	十年	十年	十年	十年	十年	十年
三月	七月	十月	十一月	四月	十一月	十一月	四月	二月	十一月	十一月	五月	五月	五月	八月	六月	十一月	四月	八月

極東研磨砥石株式會社	吉浦町二五一番地ノ二〇	昭和	五年	六月
株式會社亞細亞磨砥石製作所	阿賀町字瀧七五〇ノ一ノ一	全	十二年	十二月
中井活版所	中通六丁目二十一番地	明	十四年	四月
角井印刷所	本通二丁目四	大	十一年	三月
文鮮堂印刷所	中通五丁目十二番地	全	八年	四月
二宮石版印刷所	本通七丁目二六番地	全	十八年	十二月
杉原印刷所	堺川通三丁目八番地	昭	十年	三月
海軍聯盟印刷所	本通十二丁目十五番地	大	十五年	八月
勝能屋印刷所	宮原通二丁目九〇番地	全	十二年	七月
山中印刷所	中通二丁目一五	全	七年	八月
合資會社原商會吳出張所	東雲町一丁目六番地	昭	十年	四月
八木印刷所	本通四丁目九番地	明	七年	八月
加登印刷所	元町七十八番地	昭	五年	二月
吳日日新聞社	堺川通三丁目一番地	明	四年	十一月
中國日報社	今西通三丁目十二番地	昭	二年	十二月
吳公論社	西本通七丁目八	明	二年	十一月
平被服工場	堺川通五丁目十一番地	昭	三年	六月
柄脇洋服裁縫工場	元町九〇番地	明	四年	九月
灘波洋服裁縫所	本通九丁目五十一	大	十三年	十二月

勝浦洋服裁縫工場	三城通五丁目一五	大	四年	四月
高橋K〇堂帽子洋服加工場	松本町四七	昭	五年	二月
櫛部洋服裁縫所	中通五丁目一	全	六年	六月
池澤裁縫所	下中町八六	全	十二年	三月
吳被服工場	藏本通七丁目一四	全	十年	十月
大倉商事株式會社吳出張所	曙町一丁目一	昭	四年	十二月
大倉商事株式會社和川裁縫分工場	藏本通十四丁目四	全	四年	全
大倉商事株式會社吳出張所	西二河通四丁目一二	全	十年	全
大倉商事株式會社吳出張所	神田町十二丁目一	大	十年	三月
大倉商事株式會社吳出張所	草里町八一	昭	四年	十二月
大倉商事株式會社吳出張所	胡町六一	全	十年	全
大倉商事株式會社吳出張所	龜山町一五	全	十年	全
大倉商事株式會社吳出張所	岩方通十四丁目九	全	十年	全
大倉商事株式會社	松浦裁縫所	大	五年	三月
小原製作所	寺西町三四	大	五年	三月



勞働賃金

業種	項目	昭和十三年		昭和十二年		昭和十一年	
		最高	最低	最高	最低	最高	最低
施盤工	日給	一、五九	四、四六	二、二三	三、五〇	二、二三	三、五〇
仕上工	全	一、三三	三、四六	二、〇一	三、〇五	二、〇一	三、〇五
木型工	全	二、〇〇	二、七三	一、六〇	二、三二	二、〇〇	二、七三
鑄造工	全	一、六五	二、七三	一、二八	二、四一	一、六〇	二、七三
鍛冶工	全	一、九三	五、三三	一、三〇	四、四八	一、三〇	四、四八
清酒醸造工	全	一、三〇	二、〇〇	一、三〇	二、〇〇	一、三〇	二、〇〇
醬油醸造工	全	一、五七	二、二五	一、三〇	二、〇五	一、三〇	二、〇五
菓子製造工	全	一、二〇	二、〇〇	一、一五	一、五〇	一、一五	一、五〇
織詰工	全	一、二〇	二、〇〇	一、二〇	二、〇〇	一、二〇	二、〇〇
製材機械挽工	全	一、八〇	三、八〇	一、六七	三、四八	一、五〇	三、四八
製網女工	全	五〇	五五	五〇	五五	五〇	五五
製本工	全	一、八〇	二、〇〇	一、三〇	一、五〇	一、三〇	一、五〇
活版植字工	全	一、八〇	二、〇〇	一、八〇	二、〇〇	一、七五	二、〇〇
大工	全	二、二〇	二、六〇	二、二〇	二、五〇	二、二〇	二、五〇
左官工	全	二、五〇	三、〇〇	二、三〇	二、七〇	二、〇〇	二、五〇
石工	全	二、七〇	三、五〇	二、三〇	三、八〇	二、五〇	三、〇〇
ペンキ塗工	全	二、三〇	三、〇〇	二、三〇	三、〇〇	一、八〇	二、五〇

多賀コークス工場	阿賀町字前尾城七二〇〇(2)	昭和九年	八月
吳煉炭製造所	岩方通二丁目一〇	昭和九年	十一月
川津燃料工場	海岸通七丁目八五	昭和九年	十一月
合名會社金谷石輪製造所	堺川通一丁目一二	昭和九年	十一月
野中紙製造工場	吉浦町二、四九一	昭和九年	十一月
松本紙函製造所	公園通五丁目一	昭和九年	十一月
平尾紙器製作所	今西通九丁目五	昭和九年	十一月
四田本店	堺川通七丁目八	昭和九年	十一月
松永紙函製造所	岩方通十一丁目一九	昭和九年	十一月
一誠堂製藥株式會社	吉浦町東新開二、五一	昭和九年	十一月
小松商會銀砂工場	警固屋町丙一、八八八	昭和九年	十一月
大野硬化煉瓦製造工場	海岸通六丁目四二	昭和九年	十一月
株式會社上田工舎	濱田町六丁目三	昭和九年	十一月
山本ボロ撰別工場	海岸通一丁目四四	昭和九年	十一月
三光舎	阿賀町大坪谷二〇	昭和九年	十一月
株式會社吉浦山内鉄工所	吉浦町四一九八	昭和九年	十一月
國策カミソリ製作所	本通十一丁目一	昭和九年	十一月

名	稱	取扱別	主要取扱品	所在地	店数	一日平均利用者数 又ハ仲買人
吳水産株式会社	吳水産株式会社	卸	生魚	海岸通 二丁目	1	仲買人 400
吳果物市場株式会社	吳果物市場株式会社	全	柑類	全 三丁目	1	仲買人 1,400
株式會社阿賀魚問屋	株式會社阿賀魚問屋	全	生魚乾	阿賀町	1	仲買人 60
海岸通青物市場	海岸通青物市場	全	青物	海岸通 三丁目	1	仲買人 1,500
吳青物魚市場	吳青物魚市場	全	青物	中 通 一丁目	1	仲買人 1,500
朝日町青物市場	朝日町青物市場	全	青物	朝 日 町	1	仲買人 80
昭和市場	昭和市場	小賣	日用食料品	成 町	1	仲買人 700
阿賀大正市場	阿賀大正市場	全	全	阿賀町 東 町	1	仲買人 500
衆樂園市場	衆樂園市場	全	全	松 本 町	1	仲買人 250
松本町舊公設市場	松本町舊公設市場	全	全	全 本 町	1	仲買人 6,000
泉場町市場	泉場町市場	全	家具漆器吳服	泉 場 町	1	仲買人 500
曙町市場	曙町市場	全	全	曙 町	1	仲買人 1,500
警固屋町公設市場	警固屋町公設市場	全	日用食料品	警 固 屋 町	1	仲買人 1,500
和庄市場	和庄市場	全	全	寺 西 町	1	仲買人 1,400
大正市場	大正市場	全	全	今 西 町	1	仲買人 1,000
三津田市場	三津田市場	全	全	三 城 通 七丁目	1	仲買人 3,000
進榮市場	進榮市場	全	全	海 岸 通 二丁目	1	仲買人 4,000

本市は軍港所在地として市民の大半を俸給生活者で占め随つてその消費力は旺盛であり、加ふるに藝南地方唯一の集産市場でもあるので物資の移動も活潑である。殊に交通機關の増強は年と共に商況にも反影して殷賑の歩を加へ、「商業の吳」の將來も亦期待せられる處である。

市場

商業に見る吳

職業	性別	月給	日給	平均月給	平均日給	平均月給	平均日給
瓦葺工	男	2,500	3,200	2,200	2,800	2,500	2,000
煉瓦積工	男	3,000	3,500	3,000	3,000	2,700	2,000
疊物工	男	2,400	3,000	2,500	2,500	2,200	2,000
指物工	男	2,000	2,300	2,100	2,100	2,100	1,800
下駄工	男	2,000	2,300	2,100	2,100	2,100	1,800
靴工	男	1,200	1,500	1,400	1,400	1,400	1,200
洋服仕立工	男	1,900	2,300	2,100	2,100	2,100	1,800
日傭人夫(男)	男	2,100	2,600	2,300	2,300	2,300	1,900
全(女)	女	1,500	2,000	1,800	1,800	1,800	1,500
仲仕	男	3,000	4,000	3,500	3,500	3,500	3,000
漁夫	男	2,500	3,000	2,800	2,800	2,800	2,500
下	男	2,000	2,500	2,200	2,200	2,200	1,900
下	女	1,000	1,500	1,200	1,200	1,200	1,000



卸賣物價

(單價ハ一月ノ物價ヲ示ス)

品名	銘柄	單位	昭和十四年單價	昭和十三年單價	昭和十二年單價
内地玄米	防長赤三	一石	三四、八三〇	三五、〇〇〇	三一、六〇〇
全中	全等	全	三四、三〇〇	三四、五〇〇	三一、一〇〇
全下	全等	全	三三、八三〇	三四、〇〇〇	三一、〇〇〇
朝鮮白米	一等	全	三四、五〇〇	三四、五〇〇	三一、〇〇〇
全白米	一等	全	三四、五〇〇	三四、五〇〇	三一、〇〇〇
臺灣白米	一等	全	三四、五〇〇	三四、五〇〇	三一、〇〇〇
大麥	蓬來三	全	二〇、六〇〇	三〇、〇〇〇	二八、二七〇
中麥	鳥國	全	一五、六八〇	一四、〇〇〇	一〇、四〇〇
小麥	備中	全	二六、四〇〇	三三、〇〇〇	一九、〇〇〇
大豆	朝鮮中	全	二六、四〇〇	二四、五〇〇	二五、四〇〇
小豆	北海道三	全	三三、七六〇	三三、五〇〇	三三、〇〇〇
菜豆	北海道三	全	三三、七〇〇	一〇、〇〇〇	一三、一三〇
澱粉	雪印	袋二二斤	五、三三〇	四、七九〇	五、〇八〇
甘藷粉	北海道一	百封度	一〇、〇〇〇	七、〇〇〇	九、〇七〇
馬鈴薯	全地	全	一、五〇〇	一、〇七〇	一、一三〇

品名	銘柄	單位	昭和十四年單價	昭和十三年單價	昭和十二年單價
大玉	全地	全	一、一〇〇	一、一〇〇	七〇〇
午玉	全地	全	四、七〇〇	四、三〇〇	二、四〇〇
内肉	中付	全	六、〇〇〇	五、五〇〇	五、七七〇
豚肉	骨付	全	三九、〇〇〇	三二、〇〇〇	三〇、〇〇〇
鶏肉	骨付	全	三、八〇〇	三、五〇〇	一八、〇〇〇
鶏卵	内付	全	三、〇一七	二四、三三〇	三、〇〇〇
牛乳	全	全	五五〇	五五〇	一九、〇〇〇
生魚	近海	一貫升	一三五、〇〇〇	一一〇、〇〇〇	一一〇、〇〇〇
生魚	送海	全	五三、三〇〇	—	一〇、〇〇〇
生魚	全	全	三一、六七〇	—	三三、〇〇〇
生魚	全	全	一一、三〇〇	—	一〇、〇〇〇
鹽	北海	全	三三、〇〇〇	一六、五〇〇	一三、〇〇〇
醬油	吳産	全	四、七〇〇	四、四五〇	四、〇〇〇
味噌	赤産	全	四、六五〇	八三〇	四、〇〇〇
地物	赤産	全	四、〇〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇
三盆白	號等	一叭三〇斤	一七、〇〇〇	一、四四五	一、四四五
製糖	二號	百斤	二五、八〇〇	二四、三六〇	二三、三三〇



品名	銘柄	單位	單價		
			昭和十四年	昭和十三年	昭和十二年
内地白米	一等	一石	二八〇	二八五	二四三
全地白米	二等	一石	二七五	二七七	二三六
朝鮮白米	三等	一石	二六八	二七二	二三九
内地白米	四等	一石	二六三	二七〇	二三三
全地白米	五等	一石	二五八	二六五	二三〇
臺灣白米	六等	一石	二五三	二六〇	二二七
改良白米	七等	一石	二四八	二五五	二二四
麥	全	一打	二〇〇	一七〇	一六〇

小賣物價

(單價ハ一月ノ物價ヲ示ス)

伊豫改良中紙	一箱二千枚	一〇、七二〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇
朝日王	一打	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
花王	一打	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
ボックス風車印	一打	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
上野物	一斤	六、四〇〇	五、〇〇〇	四、四〇〇
白キヤラコ九半	一打	五、四〇〇	四、八〇〇	四、七〇〇
綿色短	一打	二、五〇〇	一、七四〇	一、四四〇
kシマン十二號	一打	一、〇〇〇	八、五五〇	八、五〇〇

硫酸	六十度	百ポンド	五、〇〇〇	五、〇〇〇	四、八〇〇
苛性	七十度	一罐	五、七〇〇	五、五〇〇	五、〇〇〇
硝酸	四十度	百ポンド	一六、〇〇〇	一六、〇〇〇	九、五〇〇
水醋	九十六度	一罐	一一、〇〇〇	九、八〇〇	一二、五〇〇
グセリ	局方物	一罐	一一、〇〇〇	一一、〇〇〇	一一、二五〇
松脂	輪入物	百斤	二六、〇〇〇	三八、〇〇〇	三三、三〇〇
重油	白石	一箱二罐	二八、〇〇〇	二五、〇〇〇	二五、〇〇〇
石油	上松	全	七、四〇〇	七、二〇〇	七、〇〇〇
揮發油	黒貝	全	七、一〇〇	七、〇〇〇	六、四〇〇
石炭	九州一等塊	一噸	二七、三〇〇	二四、九〇〇	一八、五〇〇
コーク	ガスコーク	全	五、四〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇
薪炭	雜木	一貫	一、〇〇〇	九〇〇	六五〇
木炭	佐伯産黒丸	一俵	一、三〇〇	一、九五〇	一、〇五〇
白炭	三木産黒丸	二俵	七、九〇〇	六、五〇〇	六、〇〇〇
珪石	亞木産黒丸	一三打	二、四〇〇	二、二〇〇	二、四七〇
瑪瑙	洗面器(並物二十種)	一打	二、四〇〇	二、二〇〇	二、四七〇
瑪瑙	ツバメ	一箱	二、四〇〇	二、二〇〇	二、四七〇
マツ	内地製	一打	二、五〇〇	二、四〇〇	二、四七〇
ハトロン紙	十造	一噸	一三〇、〇〇〇	一一〇、〇〇〇	一三〇、〇〇〇
板紙	十造	一噸	二、〇〇〇	二、〇〇〇	一、七〇〇
印刷材料	紙	一噸	二、〇〇〇	二、〇〇〇	一、七〇〇



茶	晒木	金巾裏	モス縫	綿糸	綿袋	足下	靴炭	木全	薪全	機全	石全	半全	塵全
川	十貫	海物	三女	白千	着四	白キヤラコ	綿色	白楸	雜楸	燕楸	花楸	機楸	中楸
柳	一斤	物	全	合	上	半	短	丸	丸	木	印	王	隊
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六〇〇	一、三〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	九五〇	七、五〇〇	六五〇	二、三〇〇	二、四六〇	二、三五〇	一、八〇〇	一、一〇〇	一、〇〇〇	一、八〇〇
五〇〇	九〇〇	一、五八〇	三八〇	七〇〇	五、三五〇	五六〇	一四五〇	二、二五〇	二、〇〇〇	一、六〇〇	一、八〇〇	一、〇〇〇	一、四〇〇
五〇〇	八四〇	一、五〇〇	三三〇	七〇〇	四、五五〇	五五〇	一四〇	二、〇八〇	一、八〇〇	一、四〇	〇七〇	一〇〇	四〇〇

### 會社と各種組合

企業熱の旺盛、商況進展に伴ふ會社の設立また相次ぎ、昭和十三年末に於て主なるものは株式會社六

十六、合資會社八十五、合名會社三十四と各その數字を増してゐる。  
株式會社

名	稱	營業種目	所在地	設立年月日	資本又ハ出資額	拂込額又ハ出資額
吳朝日株式會社	株式會社	貸地及貸家業	朝日町五三	明治二十九年七月	三六、〇〇〇	三六、〇〇〇
株式會社吳銀行	株式會社	普通銀行業	本通六丁目二	昭和二年四月	三、〇〇〇、〇〇〇	七五〇、〇〇〇
娛樂場株式會社	株式會社	家屋ノ貸付	中通八丁目六	明治三十八年十一月	一〇〇、〇〇〇	五〇、四〇〇
朝日劇場株式會社	株式會社	劇場及家屋貸付	明神町三六	明治四十年五月	一一〇、〇〇〇	一一〇、〇〇〇
株式會社 吳青物市場	株式會社	市場家屋貸付	堺川通二丁目四	明治四十年十二月	一六〇、〇〇〇	一六〇、〇〇〇
株式會社 花園俱樂部	株式會社	貸家業	本通六丁目四	明治四十一年七月	一〇、〇〇〇	八、〇〇〇
吳陽薪炭株式會社	株式會社	薪炭卸業	通岸通四丁目五九	明治四十五年五月	二五、〇〇〇	八、七五〇
吳無盡株式會社	株式會社	無盡業	岩方通五丁目二	大正二年六月	一〇〇、〇〇〇	四七、五〇〇
株式會社阿賀穀物問屋	株式會社	穀物問屋業	阿賀町五、七五六	大正七年十二月	三七、五〇〇	三七、五〇〇
吳醬油株式會社	株式會社	醬油製造	古川町一八	大正八年三月	五〇、〇〇〇	二五五、〇〇〇
吳砂糖株式會社	株式會社	砂糖販賣	今西通三丁目四	大正九年一月	五〇、〇〇〇	二五、〇〇〇
株式會社天命社	株式會社	葬儀請負業	堺川通七丁目七	大正九年三月	五〇、〇〇〇	二一、五〇〇
帝國活動寫眞株式會社	株式會社	活動寫眞常設館	本通六丁目二	大正九年九月	一一〇、〇〇〇	四八、〇〇〇
春日座劇場株式會社	株式會社	劇場貸貸	中通四丁目三	大正九年十月	二五〇、〇〇〇	九二、五〇〇
和庄土地建物株式會社	株式會社	家屋賃貸	寺西町一	大正十年六月	一五〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇

吳果物市場株式會社	生果委託販賣	海岸通三丁目四五	大正十一年四月	一五〇,〇〇〇	三七,五〇〇
第一實業株式會社	金穀貸付業	朝日町五七	大正十一年六月	一〇〇,〇〇〇	二五,〇〇〇
藝南電氣軌道株式會社	運 輸 業	本通九丁目一二	大正十一年十二月	二,〇〇〇,〇〇〇	一,八〇〇,〇〇〇
吳衆樂園	家 屋 賃 貸	明神町三	大正十二年四月	一八〇,〇〇〇	一八〇,〇〇〇
安藝飲料株式會社	清涼飲料水製造	吉浦町二、四二七	大正十二年十一月	一〇〇,〇〇〇	二五,〇〇〇
株式會社 松 本 組	土 木 請 負	中通一丁目一〇	大正十四年五月	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
博愛汽船株式會社	發動機船=依ル	吉浦町丙四一九八	大正十四年十月	一〇〇,〇〇〇	三七,八〇〇
吉浦海陸運輸株式會社	貨客運送取扱業	吉浦町四一九八	昭和二年一月	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇
吳合同運送 株式會社	鐵道貨物運送業	今西通一丁目五	昭和二年三月	一五〇,〇〇〇	二五,〇〇〇
山陽土地株式會社	海 面 埋 立	北迫町八〇	昭和二年七月	一,一〇〇,〇〇〇	一,一〇〇,〇〇〇
吳水産株式會社	魚類委託販賣	海岸通二丁目五六	昭和三年二月	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
吳棧橋汽船 株式會社	棧 橋 業	吉浦町丙新地四六	昭和三年九月	一〇〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇
吳洋無盡株式會社	無 盡 業	本通九丁目一二	昭和二年九月	一〇〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇
株式會社 植田吳服店	吳服反物卸小賣	本通八丁目一一	昭和四年四月	一五〇,〇〇〇	一五〇,〇〇〇
株式會社 阿賀魚問屋	魚類委託販賣	阿賀町六七四一	昭和四年五月	一〇〇,〇〇〇	二五,〇〇〇
株式會社 吳日日新聞社	新 聞 發 行	堺川通三丁目一	昭和四年六月	八五,〇〇〇	八五,〇〇〇
株式會社 常盤會	動 産 不 動 産	西本通一丁目一七	昭和四年十二月	三〇〇,〇〇〇	二二,〇〇〇
第一吳製氷 株式會社	製 氷 業	海岸通四丁目六九	昭和五年四月	二五,〇〇〇	六二,五〇〇
フサヤ商事 株式會社	紙文具ペン先 全鋼材販賣	岩方通五丁目一	昭和六年一月	五〇,〇〇〇	三三,五〇〇

株式會社セーラー万年筆 阪川製作所	万年筆製造、金 ペン、文房具製 造、精密機械器 具製造販賣	濱田町十丁目七	昭和七年八月	五〇〇,〇〇〇	五〇〇,〇〇〇
株式會社 櫻松俱樂部	時 計 及 貴 金 屬 製 品 販 賣	本通八丁目二三	昭和七年十一月	一〇,〇〇〇	六,〇〇〇
吳軍港土地株式會社	土 地 建 物 賣 買	寺西町一四	全 全	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
株式會社沿岸タクシー	自 動 車 運 輸 業	今西通二丁目三	大正十五年四月	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇
元公設市場 土地建物株式會社	家 屋 賃 貸	松本町三	昭和七年四月	一六,五五〇	一一,五八五
日本銀砂株式會社	硃石、長石、石灰 石ノ探堀銀砂製 造販賣及ビ粉碎 業	西本通四丁目一	昭和八年一月	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
株式會社 上田 工 合	土地建物塗裝 飾廣告ニ關スル 事業	濱田町六丁目三	昭和八年一月	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
山陽商船株式會社	荷 客 航 運 業	海岸通二丁目五六	昭和十年十二月	三〇,五〇〇	三〇,五〇〇
極東研磨砥石株式會社	金 剛 砥 石 製 造 販 賣	吉浦町二、五一	昭和十年八月	一〇〇,〇〇〇	一七五,〇〇〇
株式會社 守安ドリル	ドリル製造販賣	東二河通二丁目三	昭和十年六月	三〇〇,〇〇〇	一五〇,〇〇〇
日鮮産業株式會社	船 舶 運 送 業	海岸通三丁目一二	昭和十年七月	一〇〇,〇〇〇	三五,〇〇〇
株式會社片山徳一商店	各 國 織 物 反 物 卸 小 賣	泉場町二三	昭和十年五月	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇
吳肥料株式會社	下 肥 及 全 肥 料 販 買	寺西町三一	昭和九年四月	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇

昭和澱粉株式會社	各種澱粉及穀粉製造加工販賣	吉浦町乙四一九八	昭和十年三月	100,000	70,000
株式會社 難波洋服店	洋服調製販賣	本通九丁目五一	昭和十年二月	96,000	96,000
京屋護謄株式會社	各種護謄製品及原料製造販賣	藏本通五丁目四	全	100,000	100,000
阿賀運送株式會社	運送取扱業	阿賀町四、四二一	昭和十年十一月	10,000	5,000
一誠堂製藥株式會社	製藥業	吉浦町二、五一	全	100,000	25,000
株式會社 吳鉄工所	造船造機諸機械修理業	吉浦町四、一七八	昭和十一年一月	150,000	37,500
吳商工運送株式會社	海陸荷客運送業	海岸通二丁目五六	昭和十一年十一月	70,000	70,000
株式會社 吉浦山内鉄工所	工業機械製造	吉浦町乙四一九八	昭和十一年四月	25,000	25,000
合同自動車株式會社	旅客運送並貨切自動車業	本通三丁目一三	昭和十一年十月	100,000	100,000
株式會社 吳松	百貨陳列輸出入卸賣業	本通九丁目一二	昭和十二年九月	500,000	250,000
株式會社 鳳來合	海陸運送倉庫業代理業勞力請負	岩方通三丁目一	昭和十三年一月	10,000	10,000
株式會社 野村彌商店	文房具事務用具機械器具印刷器製圖具、活動寫真器並修理販賣	本通四丁目十二	昭和十三年一月	100,000	50,000

吳乾物株式會社	食料品ノ賣買並委託業及一切ノ業務	堺川通二丁目三	昭和十三年十月	50,000	50,000
吳セルロイド工業株式會社	セルロイド及可塑物ノ製造販賣並之ニ附帶スル業務	濱田町十丁目七	昭和十三年十月	100,000	25,000
株式會社 亞細亞研磨砥石製作所	各種研磨砥石ノ製作並一切ノ業務	阿賀町七五〇一	昭和十三年十一月	150,000	52,500
吳青果株式會社	蔬菜果實海產物並其等ノ加工品及其ノ他食料品及一切ノ委託及買付販賣之ニ附帶スル一切ノ業務	堺川通二丁目一〇	昭和十三年十一月	180,000	180,000
日東商事株式會社	洋服並裏地類及洋服附屬品類販賣	本通六丁目二七	昭和十三年十一月	50,000	33,500
大吳自動車株式會社	旅客運送并貨切自動車業	今西通一丁目三		100,000	100,000
吳貨物自動車株式會社	物品貨切運送事業	海岸通五丁目	昭和十三年十二月	150,000	150,000

合資會社

名稱	營業種目	所在地	設立年月日	出資額
吳石材合資會社	石材採取販賣	東雲町三丁目一三	大正十一年十一月	一三、〇〇〇
極東鑛製造合資會社	鑛製及改造	上山手町一六	大正十三年八月	二四、〇〇〇
合資會社 春尾商店	牛肉販賣	松本町五九	大正十四年四月	三六、〇〇〇
合資會社 中野商店	活判印刷業	藏本通五丁目八	大正十五年七月	五、〇〇〇
合資會社 昭和電氣商會	電球販賣	中通六丁目一二	昭和二年一月	二、〇〇〇
合資會社 米家酒場	酒類卸小賣	今西通七丁目一二	昭和二年四月	二、〇〇〇
合資會社 藤井商店	米穀販賣商	海岸通二丁目三六	昭和二年七月	四、〇〇〇
合資會社 食料市場	青物委託販賣	海岸通三丁目四ノ(7)	昭和二年七月	一、〇〇〇
合資會社 高原商店	酒類販賣	朝日町七	昭和二年八月	二、五〇〇
合資會社 宮岡商店	洋服調製販賣	泉場町二三	昭和二年八月	三、〇〇〇
合資會社 昭和商會	清酒販賣	公園通四丁目一	昭和二年九月	三、〇〇〇
吳運送合資會社	鐵道貨物運送業	今西通二丁目一	昭和二年十一月	一〇、〇〇〇
合資會社 富島組	木材代理販賣業	荒神町一一	昭和三年三月	二、〇〇〇
合資會社 天下堂	洋品雜貨販賣	本通九丁目五三	昭和三年三月	八、〇〇〇
合資會社 川市商店	金銀貨付業	阿賀町二九二三ノ(1)	昭和三年四月	五〇、〇〇〇
合資會社 山陽食料品店	清涼飲料水製造	鹿田町一	昭和三年七月	二、五〇〇
合資會社 トラヤ時計店	時計及貴金屬販賣	本通七丁目一	昭和四年一月	二、〇〇〇

合資會社 堀源商店	化粧品販賣	本通十一丁目二四	昭和四年四月	三、〇〇〇
土地建物合資會社	土地建物販賣	海岸通二丁目五六	昭和四年七月	二八、九〇〇
合資會社 古林旅館	旅人宿業	本通五丁目一五	昭和四年八月	九、五〇〇
合資會社 原田藥舖	藥品卸商	本通六丁目三二	昭和五年三月	五〇、〇〇〇
合資會社 青盛商店	物品販賣及製材業	西二河通一丁目一二	昭和八年十二月	七、〇〇〇
合資會社 東洋クロームペン製作所	ペン先製造販賣	西二河通六丁目十二	昭和十二年十二月	三、〇〇〇
高須雜詰合資會社	罐詰製業	西二河通三丁目五	明治三十一年七月	七六、六〇〇
合資會社 便益購買會	金銀錢貨付	岩方通四丁目一六	大正四年十二月	五、六〇〇
合資會社 川又商店	清酒釀造業及食料品販	藏本通四丁目	大正十年十月	一〇〇、〇〇〇
合資會社 藤原商店	米穀雜貨販賣	西本通二丁目一〇	昭和六年一月	一、〇〇〇
合資會社 福人商店	書籍販賣業	本通五丁目八	昭和六年五月	八、〇〇〇
合資會社 新田商店	吳服販賣	東雲町一丁目九	昭和六年二月	一〇、〇〇〇
合資會社 朝日金ペン製作所	金ペン製造販賣	今西通二丁目五	昭和六年一月	五、五〇〇
合資會社 山口屋	米穀販賣	海岸通六丁目四	昭和六年三月	一、〇〇〇
合資會社 山王商店	雨傘其他荒物販賣	下中町三六ノ(2)	昭和六年十月	一、〇〇〇
合資會社 中原商店	米穀薪炭販賣	本通十二丁目一七(7)	昭和七年一月	九〇〇
合資會社 西本商店	菓子製業	西二河通六丁目一	昭和七年二月	一、〇〇〇
合資會社 田房洋服店	洋服製業	曙町三丁目一五	昭和七年九月	四、〇〇〇
合資會社 遠藤酒造場	酒類製造業	本通十二丁目ノ(1)	昭和七年十一月	一五〇、〇〇〇



合資會社 烟吳服店	吳服太物商	中通九丁目一	昭和七年三月	五、〇〇〇
新榮合資會社	土地建物有價證券買賣	寺西町一四	昭和四年一月	五〇、〇〇〇
合資會社 幸元商店	空箱空瓶其他買賣	中通五丁目一五	昭和七年十二月	一、〇〇〇
合資會社 川路商店	酒類製造業	阿賀町四、五一四	昭和七年六月	五〇、〇〇〇
合資會社 大石鐵工所	發動器製作及修理	警固屋町一、三七〇(6)	昭和七年六月	三、〇〇〇
國產ガソリン合資會社	ガソリン製造販賣	岩方通四丁目一六	昭和六年八月	八、五〇〇
合資會社 名井商店	自動車運輸業	海岸通三丁目四五	昭和七年七月	五、〇〇〇
合資會社 大多商店	製綿薄團製造	阿賀町一、九五七	昭和七年九月	二、六〇〇
合資會社 堤自動車部	自動車貨貨業	宮原通七丁目一七	昭和八年一月	四、〇〇〇
合資會社 小松屋商會	洋品雜貨	中通五丁目八	昭和八年三月	五、〇〇〇
合資會社 其成社	金錢ノ貸付	藏本通五丁目八(12)	昭和八年四月	二、二六
合資會社 山本ゴム製造所	ゴム製品	海岸通七丁目七〇(2)	昭和八年五月	二、〇〇〇
合資會社 藤井庄作商店	傘製	本通十二丁目四一	昭和八年七月	六〇〇
合資會社 橋本商店	吳服製造	神田町九丁目十一	昭和八年八月	三、〇〇〇
合資會社 馬場商店	製菓子原料販賣	松本町三	昭和八年三月	五、〇〇〇
合資會社 厚井食品店	食料品販賣	三城通六丁目一	昭和八年一月	六、〇〇〇
合資會社 田中組	運搬業	西畑町十一	昭和九年二月	六、〇〇〇
合資會社 豐後屋旅館	旅館業	中通七丁目一〇	昭和九年三月	一、〇〇〇
合資會社 野村万年筆製作所	万年筆製造	堺川通五丁目六	昭和九年八月	二〇、〇〇〇

朝日館活動寫眞	建物ノ貨貨	東雲町三丁目一八	昭和九年十二月	一八、〇〇〇
合資會社 大林良香商店	有價證券買賣	本通七丁目八	昭和九年九月	一〇、〇〇〇
合資會社 高松進榮堂	海軍用達紙販賣	胡町一八	昭和九年九月	四、三〇〇
合資會社 中央金ペン製作所	金ペン並文具製造販賣	三城通八丁目一八	昭和九年九月	一五、〇〇〇
山中石材合資會社	石材販賣	本通十丁目一三	昭和九年五月	三、〇〇〇
岡田合資會社	料理業	堺川通四丁目一	昭和九年六月	四、〇〇〇
合資會社 安浪電氣工業所	電氣器具販賣	藏本通六丁目一〇	昭和九年九月	五、〇〇〇
合資會社 水晶堂	印刷彫刻	中通五丁目一二	昭和九年六月	二〇〇
合資會社 中本商店	菓子製造	三城通六丁目一二	昭和九年六月	一、〇〇〇
合資會社 日高式黑板製作所	黑板製造	和庄通一丁目三〇	昭和九年六月	三、〇〇〇
合資會社 喜久家本店	料理解業	本通七丁目二三	昭和十年一月	六、〇〇〇
合資會社 加藤益店	陶器及漆器ノ販賣	本通二丁目二七	昭和十年六月	二、〇〇〇
合資會社 吳友田書店	書籍雜誌及一般圖書販賣	本通四丁目七	昭和十年九月	三、〇〇〇
合資會社 宮堂商店	内外諸革靴原料ノ卸賣	中通五丁目一九	昭和十年十一月	一〇、〇〇〇
合資會社 田中細工店	唐木細工製造販賣	堺川通五丁目九	昭和十年一月	二、〇〇〇
合資會社 吉浦造船所	造船造機及諸機械修理	吉浦町二、五一二	昭和十一年一月	六〇、〇〇〇
合資會社 松下商店	日用品及食料雜貨販賣	西三津田町二(2)	昭和十一年三月	四、〇〇〇
吳汽船合資會社	旅客運送	海岸通二丁目二三	昭和十一年三月	一〇、〇〇〇

名	營業種目	所在地	設立年月日	出資額
合資會社 丸三交換會	メリヤス雜貨交換及賣	堺川通四丁目九	昭和十一年十月	三、〇〇〇
合資會社 中本總本店	買物品販賣	本通六丁目一五	昭和十一年四月	三〇、〇〇〇
合資會社 末永製針所	製針業	明神町八	昭和十一年七月	三、五〇〇
合資會社 丸三株式會社	有價證券買賣	本通三丁目十四	昭和十二年二月	八、〇〇〇
合資會社 大阪每日新聞吳販賣所	新聞販賣業	堺川通三丁目一	昭和十二年一月	一〇〇、〇〇〇
合資會社 東歸工業所	電氣機械器具製作並修	今西通四丁目一	昭和十二年四月	三、〇〇〇
合資會社 稻葉醬油合資會社	醬油販賣	寺西町一六	昭和十二年三月	七、〇〇〇
合資會社 保善社	金融並有價證券ノ買賣	今西通五丁目一	昭和十二年十月	二、五〇〇
合資會社 花村商店	食堂經營	龜山町一五	昭和十三年一月	五〇〇
池田菓子製造合資會社	菓子製造販賣	岩方通十一丁目	昭和十二年十二月	三、〇〇〇
合資會社 中國靈記牌製作所	靈記牌製作其他之ニ關係シ必要ト認ムル事業	本通二丁目十八	昭和十三年五月	二、一〇〇
合資會社 雙葉被服工場	被服裁縫業	本通十二丁目十二	昭和十三年四月	三、八〇〇

名	營業種目	所在地	設立年月日	出資額
合名會社 谷口屋洋服店	洋服製	本通一丁目一三	大正八年八月	三〇、〇〇〇
植野薪炭合名會社	薪炭販賣	海岸通三丁目一八	大正十三年二月	三、〇〇〇

名	營業種目	所在地	設立年月日	出資額
合名會社 三宅清兵衛商店	清酒製	本通十四丁目四二	大正十四年七月	二、〇〇〇、〇〇〇
合名會社 宮原商店	綿販賣	本通七丁目二三	昭和三年一月	一、〇〇〇
吳金ベソ合名會社	萬年筆販賣	元町三〇	昭和三年五月	一五、〇〇〇
合名會社 金川仲藏商店	醬油釀造	西二河通七丁目一三	昭和四年一月	七〇、〇〇〇
合名會社 水野組	請負業	宮原通八丁目五	昭和四年四月	二、七〇〇、〇〇〇
合名會社 沖田商店	菓子卸商	元町四	昭和五年一月	一〇、〇〇〇
庚午合名會社	債權買賣取立證券買賣	濱田町十二丁目一	昭和五年一月	二五、〇〇〇
合名會社 五びすや吳服店	吳服販賣	中通九丁目五	昭和五年十月	三七、五〇〇
大宮合名會社	土地家屋有價證券買賣	今西通二丁目三	昭和五年十一月	三〇、〇〇〇
吳製樽合名會社	酒樽製	本通十四丁目四三	昭和六年一月	二五、〇〇〇
合名會社 眞柴商店	自轉車販賣	中通一丁目一二	昭和六年二月	五、〇〇〇
合名會社 井上一誠堂	諸藥品及度量器具	中通九丁目三〇	昭和六年五月	一一〇、〇〇〇
虎尾合名會社	吳服販賣業	岩方通八丁目一	昭和七年一月	三、〇〇〇
合名會社 電友社	電氣工業	藏本通七丁目一四	昭和七年二月	八、〇〇〇
合名會社 設樂洋品店	洋品類販賣	中通九丁目一	昭和八年二月	五、〇〇〇
合名會社 富士屋本店	ゴム製品足袋靴製造販賣	本通六丁目一三	昭和八年二月	五〇、〇〇〇
合名會社 吳罐詰工業所	食料品及罐詰製造	海岸通二丁目七八(1)	昭和八年九月	二〇、〇〇〇
合名會社 森田吳服店	吳服物販賣	中通七丁目一六	昭和八年五月	六、〇〇〇
合名會社 神田屋	京染請負白生地及染吳服販賣	本通五丁目五	昭和九年十二月	一〇、〇〇〇

合名會社 金谷石鹼製造所	石鹼製造 販賣	堺川通一丁目二	昭和十年一月	一五〇、〇〇〇
合名會社 京染山奥	京染取次洗張一切及白生地吳服販賣	中通三丁目一	昭和十年一月	四五、〇〇〇
合名會社 西阪商店	各種澱粉及穀粉製造販賣並加工	吉浦乙四一九八ノ(15)	昭和十年二月	一〇〇、〇〇〇
合名會社 椋田金玉堂	建具材料襖床材料家具販賣	今西通三丁目九	昭和十年三月	一〇〇、〇〇〇
合名會社 戸田商店	菓子及菓子原料販賣	東雲町二丁目一五	昭和十年四月	五、〇〇〇
合名會社 鳥越商店	米穀薪炭酒類其他日用品販賣	松本町一	昭和十年十一月	二、〇〇〇
合名會社 管波商店	船具土木建築其他販賣	海岸通二丁目二三	昭和十一年二月	一〇〇、〇〇〇
合名會社 相原徳商店	綿花繙帶材料製造販賣	公園通四丁目一	昭和十一年四月	一、〇〇〇
合名會社 山本組	土地ノ開拓經營分讓並賃貸家屋ノ建築及分讓土木建築請負	西惣付町一二	昭和十二年三月	二、八〇〇
吳味噌麴合名會社	土地建築勞力供給等請負	上山手町七三	昭和十二年三月	二、五〇〇
稻葉醬油合名會社	味噌類ノ製造販賣並之ニ附屬スル業務	榮町三十二	昭和十三年一月	二〇、〇〇〇
合名會社 吳被服工場	醬油 販賣	寺西町一六	昭和十二年三月	七、〇〇〇
	被服類ノ製造販賣並之ニ附屬スル一切ノ業務	藏本通七丁目十四	昭和十三年十月	四、五〇〇

商工業組合並各種組合

時代的傾向として商工業界は從來の如き個人的發展は望み難く、同種同業者の一致團結による經營時代と化したので、本市に於ても商工業組合の設立相次ぎ、各業種に於て夫々組合組織が進められてゐるが、昭和十四年五月迄に公認された組合は左記の二十一組合である。

商工業組合

組 合 名	理 事 長	組 員 數	設 立 年 月	事 務 所 々 在 地
吳穀物卸商業組合	新原虎之助	七	昭和九年六月	海岸通三丁目
吳牛乳商業組合	齋藤健二	四七	全 九年三月	濱田町四丁目
吳洗濯商業組合	山口廣吉	三三	全 八年十一月	岩方通九丁目
吳菓子商業組合	空尾松藏	二四	全 九年十二月	全 五丁目
吳麵類卸商業組合	坂本徳太郎	三三	全 十一年五月	西二河通八丁目
吳豆腐油揚蒟蒻商業組合	山本徳厚	九	全 十二年四月	松本町五
吳米穀小賣商業組合	佐々木鹿藏	一七	全 九年十一月	海岸通三丁目
吳バナ、色附卸商業組合	藤村三郎	四	全 十一年十一月	中通二丁目
吳食肉卸商業組合	藤井嘉八郎	三〇	全 十三年三月	上山手町(屠場内)
中 通 商 業 組 合	瀬尾順次郎	一六	全 十二年四月	中通八丁目
本 通 商 業 組 合	堀岡眞一	二八	全 十二年七月	本通七丁目

組名	組合名	組合長	組合員數	設立年月	事務所所在地	電話
吳酒類商業組合	上田作	一	元	昭和十二年七月	本通二丁目	
吳金物商業組合	堀部信	一	七	全 十三年九月	本通七丁目	
製氷卸商業組合	梶山壽	二	九	全 十三年七月	今西通十二丁目	
吳洋服商業組合	小泉逸	二	四	全 十三年十一月	岩方通七丁目	
吳織物雜貨卸商業組合	藤國末	一	五	全 十四年五月	吳商工會議所	
吳鐵工機械工業組合	淺海信	一	四	全 十四年十二月	岩方通一丁目	
吳家具工業組合	藤田得	一	五	全 十二年十月	明神町四	
吳印刷工業組合	中山村	博	三	全 十二年十月	中通六丁目	
吳被服工業組合	山本直	武	九	全 十三年八月	龜山町一五	
吳皮革製品工業組合	藤國末	吉	二	全 十四年一月	本通六丁目一三	

各種商工組合又ハ團體

組名	組合名	組合長	組合員數	設立年月	事務所所在地	電話
廣島縣清涼飲料水同業組合吳支部	三木染次郎	三	三	大正九年七月	下中町三二	三、一五七
吳藥業會	梅本岩之進	一五	八	明治三十八年五月	中通五丁目	二、七〇〇
吳市古綿打替同業組合	久保木逸平	八	八	昭和六年四月	上山手町二五	二、八〇四
吳洋服技術同志會	久保田國人	九〇	九〇	大正七年三月	宮原通二丁目	四、二七三

組名	組合名	組合長	組合員數	設立年月	事務所所在地	電話
廣島縣醬油釀造組合	畦地壽郎	三七	三七	昭和三年四月	古川町	二、五五七
吳卸商組合	林利平	七	七	昭和二年七月	吳商工會議所	五、一七六
吳市工業聯盟會	宮崎俊太郎	二五〇	二五〇	大正十三年十一月	吳市役所	五、一七五
吳印刷業組合	二宮千穂見	一八	一八	昭和二年九月	本通七丁目	五、二一一
吳金ペン製造組合	金尾滿喜太	三	三	全 二年六月	胡町	二、八七七
吳金物商組合	堀部信一	七	七	明治四十五年七月	本通七丁目	四、三七六
吳陶器商組合	松川龜太郎	五	五	大正三年一月	本通六丁目	三、七五五
吳漆器家具商組合	林房吉	六	六	大正三年一月	泉場町	三、〇四一
吳海軍菓子常納組合	山崎鐵次	九	九	昭和二年九月	堺川通一丁目	三、三五四
吳左官材料商組合	石中寅吉	二	二	大正十五年二月	堺川通四丁目	二、三三六
吳材木商組合	片山周吉	三	三	全 元年七月	西二河通一丁目	四、六四三
吳自轉車古物商組合	港伊勢松	三	三	全 十二年六月	藏本通十丁目	三、一六三
吳度量器具販賣組合	井上靜夫	一五	一五	全 十五年六月	中通九丁目	二、五五三
吳寫真師協會	正岡康成	五〇	五〇	昭和三年五月	本通十三丁目	三、七九六
吳仲介業組合	天宮行治	八〇	八〇	大正十一年六月	和庄通四丁目	三、五〇六
吳染業組合	後藤滿造	三	三	全 七年五月	神田町六丁目	二、五三六

吳青果業合友會	竹田福松	九〇〇	昭和三年	元町	二〇三三
吳魚市場仲介人組合	亘新二郎	四〇三	全三年四月	吳水産株式會社	二、六〇三
吳化粧品小間物商組合	山縣鉄之助	三三三	全六年四月	中通六丁目	二、五九六
吳建具業組合	吉川勘一	〇三三	大正十五年三月	松本町五五	三、三三三
吳墨業組合	福田鶴次郎	〇三三	大正十三年十月	西本通五丁目	三、〇六七
吳洋服商組合	難波喜作	〇六〇	全四年五月	本通九丁目	二、二九三
吳書籍商組合	湊義雄	〇六〇	全十三年十月	中通五丁目	三、九九三
中國ラヂオ商組合	田中石之丞	三六六	昭和三年七月	本通八丁目	三、一四八
吳實屋業組合	沖田秋太郎	五五五	明治三十五年十一月	朝日町	二、八六六
吳宿屋業組合	川上健一	八〇〇	全二十四年三月	本通四丁目	二、二三三
吳食堂組合	福島爲一	四〇〇	大正九年四月	中通五丁目	二、六六一
吳カフエー組合	西田芳雄	三三三	昭和五年六月	中通八丁目	二、〇六七
吳青物魚市場問屋組合	西本友太郎	二二二	大正六年三月	堺川通二丁目	二、〇六七
吳料理業組合	徳田一朗	九〇〇	全十四年三月	本通四丁目	三、九二六
吳表具同業組合	井上茂美	三三三	昭和五年四月	本通六丁目	三、一四二
大正市場組合	眞鍋卯三郎	七七七	大正十年四月	今西通三丁目	三、一四二

吳市青果卸賣市場	若山新一	二二二	明治三十年	海岸通三丁目	四、六九九
吳市工業發明協會	丸中隆三	二二二	昭和六年十一月	吳市役所	三、八五九
吳實業同志會	大森二郎	三〇〇	明治四十四年十月	吳海軍工廠商人溜所	四、四八八
吳糧友會	亘新二郎	四〇〇	大正十一年三月	吳海軍工廠商人溜所	四、六三三
吳實業建交會	石原丈吉	二二二	明治四十年三月	吳海軍建築部商人溜所	二、三〇六
吳電業組合	宮川辨次郎	二二二	昭和七年五月	中通六丁目	三、一四五
吳地方煙草小賣人組合	原山直兵衛	六七七	全六年七月	西本通一丁目	二、二四八
吳酒類商組合	上田作一	一八八	大正六年六月	吳商工會議所	五、一七五
吳土木建築協會	野田繁雄	三六〇	昭和七年六月	吳署建築課	五、一七六
吳文具商組合	野村彌三	三三三	全	本通四丁目	二、〇〇六
吳紙商組合	永井定一	二二二	大正七年三月	本通六丁目	二、〇〇八
本通商榮會	植田新之助	三三〇	明治四十年十二月	本通八丁目	二、四八八
吳履物商組合	出野繁人	三三三	全四十二年十月	中通九丁目	二、〇三三
吳眼鏡商組合	川崎彌助	三三三	大正十二年十一月	本通七丁目	三、九四〇
吳蓄音機商組合	中山雅顯	三三三	昭和九年四月	中通八丁目	二、三八四
吳市見本市協會	藤山末吉	三三三	全七年二月	本通六丁目	二、四八〇
吳左官業組合	石中寅吉	三三三	全十一年四月	堺川通四丁目	二、〇五六
吳周旋業組合	阿部寅藏	三三三	明治三十一年一月	堺川通六丁目	二、三三六
廣島縣酒造組合	宮崎俊太郎	三三三	大正十五年七月	吳稅務署	二、一八九
吳安藝支部					二、一六〇

吳折箱同業組合	吳興行組合	吳時計商組合	吳自動車營業組合	吳觀光協會	吳湯屋業組合	吳工藝研究會	吳植木屋組合	吳水産仲買組合	吳置屋業組合	吳藝妓共同組合	七星會	吳家具共榮組合	吳食品雜貨商組合	吳乘用自動車組合	廣島縣安藝國真田同業組合
今永周	寺内寅太郎	岩見兼吉	川崎登郎	三宅清一郎	岡本一信	山田芳三郎	大島幸二郎	亙新二郎	徳田一朗	徳田一朗	井上英一	道佛普佐雄	湊村正三郎	木野壽雄	荒川五郎
二七	三五	三五	三三	三〇	六四	六六	四四	四三	四〇	二八〇	七	二〇	一〇	二七	八
昭和七年八月	昭和七年四月	明治三十九年一月	全十一年一月	昭和七年九月	明治四十二年十月	昭和十一年十月	大正元年	昭和十二年七月	全十五年五月	全十二年六月	全十一年五月	全十一年七月	全六年四月	全五年十一月	大正六年七月
堀岡糸店	本通八丁目	中通六丁目トキワ館	本通四丁目	海岸通三丁目	吳商工會議所	宮原通六丁目	吳市役所	東辰川町一〇九	吳水産株式會社	海通二丁目	本通四丁目	東雲町三丁目	本通七丁目	中通五丁目	中通三丁目
二八六	二七六	二七六	三〇一	三〇一	五、七五	五、二一	五、二一	二、六〇三	三、九三六	三、九三六	四、四三九	二、八四〇	二、二八四	三、一四七	

吳商業美術協會	吳商工聯合會	吳産婆會	吳市辯護士會	吳美容術營業組合	吳代書人組合	吳理髮組合	吳眞田組合	吳鋸工同業組合新交會	二河馬車組合	吳府物取扱商組合	吳石炭卸商組合	吳履修組合
仁田竹一	二宮千穂見	石川萩江	秦野楠雄	高田勇八	岡田兼市	溝田尾進	藤本八左衛門	長山鉄造	脇坂竹藏	水野秀男	設定七男	神崎富吉
二六	團體書	一八六	七	三〇	四	三〇	六	三	三	四	一八〇	
昭和十年九月	大正十四年三月	昭和二年十一月	明治四十年	大正七年四月	昭和九年四月	大正六年六月	大正十年	昭和二年九月	昭和十一年一月	昭和十三年十月	昭和十三年六月	
堺川通七丁目	吳商工會議所	吳市役所保健課	吳區裁判所辯護士室内	中通五丁目	藏本通三丁目	本通八丁目	岩方通七丁目	本通十四丁目	西二河通三丁目三ノ三	東雲町四丁目五	松本町二	中山手四七
五、七五(2)	五、二一	四、二三	三、三九	四、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	三、三九	

第十一 金融

從來は納税明其他に多少の動きを見せる程度であつたが、近時産業の發達に伴ひ金融界も幾分舊觀を改め弗々ながらも各種投資事業も行はれ資金移動の趨勢も稍々活潑となるに至つたが市民の殆んどは俸給生活者で占められてゐる關係上、大勢は依然預金吸收地の域を脱せず、昭和十四年末現在に於ける市

内四組合銀行の預金総額は約六千万圓に上つてゐるに對し貸付は一千九百餘万圓に過ぎない、銀行の外に四信用組合(市街地信用組合)二無盡會社があり庶民金融機關の機能を遺憾なく發揮してゐる。

銀行名	業務	所在地	電話
株式會社 吳銀行	銀行	本通六丁目二	五、二五
株式會社 藝備銀行吳支店	同	本通五丁目五	五、二四
株式會社 不動貯蓄銀行吳支店	貯蓄銀行	中通五丁目一〇	二、八六
株式會社 三和銀行吳支店	貯蓄銀行	本通八丁目	五、三五
株式會社 廣島合同貯蓄銀行吳支店	貯蓄銀行	本通六丁目	二、二五
株式會社 住友銀行吳支店	貯蓄銀行	本通四丁目	二、一八

産業組合

産業組合の擴充強化は市民金融に又商品購買に益々その機能を發揮し吳市信用組合外十一組合の利用者は逐年増加し、驚異的進展を示してゐる。

組合名	所在地	組合名	所在地
警固屋町信用組合	警固屋町	宮原信用組合	宮原通七丁目
警固屋町信用組合	警固屋町	宮原購買組合	宮原通五丁目

無盡業

名	稱	業務	所在地	電話
吳信用購買組合	無盡業	本通二丁目	阿賀信用組合	阿賀町
吳醫師購買組合	無盡業	本通五丁目	吉浦町信用購買利用組合	吉浦町
吳第一信用組合	無盡業	藏本通十丁目	吳市信用組合	藏本通三丁目

質屋業

名	稱	業務	所在地	電話
吳無盡株式會社	無盡業	岩方通五丁目	(二、〇六三)	(二、〇六三)
吳洋無盡株式會社	無盡業	本通九丁目	(三、五九〇)	(四、四六四)

年次	店數	貸出高	受戻高	涙質高
昭和七年	六	四五六、一八六	三三三、六二四	五七、七七
昭和八年	六	四五四、八一八	三三五、八三四	五五、六二
昭和九年	六	四三七、二五〇	三八、六三三	五一、〇九五
昭和十年	六	五四〇、四九三	四六四、三三三	四八、二五九
昭和十一年	五	七三三、二六八	五六七、一八一	五九、八〇九
昭和十二年	五	一、三四、四九元	五四四、二八六	五五、八八

## 第十二 農畜水産業

118

吳浦住民の八割までは農民で、所謂吳三千石の一郷をなしてゐたが、軍港設置以後は漸次農耕地を縮め市制施行の明治三十五年頃には田畑合して五百町歩に減じ、更に昭和二年頃には三百町歩を残すに過ぎなかつた、昭和三年隣接三町を合併して約五百町歩を加へたが昔の面影はなく従つて農産物も都市に適合する園藝農作物等に逐年移動してゐる。

耕作地反別

種別	自作地	小作地	計
田	一、三七三反	一、〇三八反	二、四一一反
畑	三、〇四九	一、二二五	四、二七四
計	四、四二二	二、二六三	六、六八五

### 吳市農會とその事業

吳市農會は大正十四年設立、園藝農作或は果實栽培等都市的農産獲得に善力を傾注指導奨励に努めてゐる、尙昭和四年阿賀町に園藝場を設置してからは農作者に自から範を垂れ好成績を擧げてゐる。同會事業概要及豫算左の通り。

- 1 採種圃設置、
- 2 各種園藝奨励、
- 3 養鶏奨励、
- 4 柑橘栽培奨励、
- 5 病害虫驅除豫防、
- 6 自給肥料奨励
- 7 温室建設助成、
- 8 講習講話會開催、
- 9 先進地視察、
- 10 販賣購買の斡旋、
- 11 品評會開催、
- 12 園藝場經營

### 収入

年次	會員數	會費	使用料	補助金	寄附金	雑收入	過年度收入	繰入金	繰越金	計
昭和十年	五、〇三八	一、九〇一	一〇	三、一〇〇	七	五〇四	一〇	一	一、〇〇〇	六、六四七
昭和十一年	五、〇〇〇	一、九〇三	一〇	三、一〇〇	二〇〇	五〇四	一〇	三〇一	六〇〇	六、六七
昭和十二年	五、〇〇〇	二、一六五	一〇	三、一〇〇	一	五〇四	一〇	一	五〇〇	六、二九
昭和十三年	五、〇〇〇	二、四三六	一	三、〇〇〇	一	五〇四	一〇	七	五〇〇	六、五八

### 支出

年次	事務費	會議費	事業費	會費	積立金	過年度支出	豫備費	計
昭和十年	一、四四一	三三〇	四、一一一	四四六	二二〇	一	九	六、六四七
昭和十一年	一、八〇一	八二	三、九三七	四九九	二二〇	一	七	六、六七
昭和十二年	一、四二七	八〇	三、九四三	五〇〇	二二〇	一	一三	六、二九一
昭和十三年	一、五四五	八〇	四、〇二二	五七五	二二〇	一	八五	六、五八

### 畜産組合

吳市畜産組合の最初は市内搾乳業者に依り設立、乳牛の蓄殖、家畜市場の經營等が行はれてゐたが、時代の趨勢はその範圍の擴大を要求され、昭和七年に至り現吳市畜産組合に組織を變更、専任技術員も設置して今日に及び、畜産事業の發展と組合員の福利増進を圖つてゐる、主なる事業及豫算左の通り。

一、事業概要

119



1種畜の供給及種付、2家畜市場經營、3家畜疾病治療、4家畜衛生飼養管理の改善、5牛馬の共済事業、6品評會、共進會、講話會、講習會の開催、7畜産事業の助成、8畜産に關する事務  
 吳市畜産組合經費豫算

年次	組合員	收入			支出		
		會費	會費補助	其他	事業費	其他	計
昭和十三年	四八二	二四一	一、〇一八	六、九四四	八、一九三	二、一八六	六、九二二
全十一年	五〇〇	二七三	一、〇〇六	三、一〇一	四、三八一	一、九五五	三、一三三
全十一年	五二五	二六五	一、〇八三	三、二二二	四、五六〇	二、〇九九	三、四二二
全十一年	六六六	三〇〇	八二〇	二、七三五	三、八五五	一、八二五	三、八五五

疲弊せる漁村振興を期し昭和六年二月設立した吳市水産會は、爾來事業の獎勵、施設の改善助成等總ゆる角度から業者の福利増進、或は事業の擴大に努め、近來その機能を益々發揮してゐる。  
 吳市水産會歳入出豫算

年次	收入		支出						
	會費	補助金	雑收入	計	計				
昭和十三年	五〇四	四八〇	二二四	一、三三六	三三四	八七	三五九	三六八	一、三三六
全十二年	四九九	六九三	二二二	一、四四四	四〇六	五六	五五八	二五三	一、二七二
全十一年	四八六	六四八	六六六	一、八〇二	二七〇	五四	九二六	五五八	一、二七二
全十一年	五四五	一、三二〇	一、〇六六	二、九一三	二五八	七三	二、〇六六	五五六	二、九一三

### 第十三 土木事業

特殊的地位にある本市の土木事業も次々と追はれる新設、改良事業に繁忙を極めてゐるが、限りある市財政により行ふ土木行政にも亦相當苦難があり、理事者を悩ましてゐる。  
 しかして本市多年の要望である阿賀驛より藝備線志和口驛に至る鐵道敷設運動は期成同盟會と協力關係方面に折衝中であるが既に貴族院に於て三回、衆議院に於て四回請願及建議を通過して政府の豫定線編入につき運動中であり、鐵道省營藝豫連絡施設促進も亦全國港灣協會總會に於て賛成を得て政府に猛運動中であり之が實現も遠からざるものと期待されてゐる。尙廣島吳兩軍都市民及沿線町村民から待望された廣島吳間國道も亦廣島市附近の一部を残して開通し優秀なる物資輸送路として活用されてゐる。  
 尙吳線複線工事及急行増配、列車運轉回数増加の運動も引續き行はれてゐるが吳海田市間複線工事並急行増配に就ても最も速急に實施するものと見られてを居り、豫てより繼續事業として實施中であつた阿賀築港も愈々完成迫り、吉浦港と共に本市海の門戸として飛躍する時代が期待されるに至つた、本市に於ける土木事業概要左の通り。

道路改修工事 昭和十三年度中に竣工したるもの  
 江原町自八四至八五番地地先、宮原通十三丁目自一一四至一一五番地地先、江原町八一番地々先至二河公園、茄地町四四番地々先、長迫町二〇一番地々先、三城通三丁目自一至一一番地々先、海岸通七丁目三一番地々先、阿賀町延崎五八九一番地々先外一ヶ所、和庄通二丁目四〇番地々先、宮原通十三丁目一三二番地々先、下山川線道路、西辰川線道路、延崎冠崎線道路——以上各改修工事  
 横貫五號線外各道路、藏本通線、浮石共同墓地道路、自宮原通一丁目至同三丁目地内、曙町三丁目地内、宮原通線

—以上舗装修繕工事

### 建築整地其他工事

昭和十三年度中に竣工したるもの

東高等小學校々舎、神原小學校々舎、坪之内小學校講堂、水道擴張部工事々務所、市營倉庫外四百三十一件——以上新築工事

東小學校門及塀、神原小學校門及塀、東高等小學校整地工事外三十九件——以上新設又は改築

### 都市計劃

昭和十二年十月決定した吳都市計畫街路及追加線として本通警固屋線、吳驛前廣場等につき調査を完了、都市計畫廣島地方委員會に内議し引續き各事業案決定並實施に邁進してゐるが更に都市計畫公園として宮原公園、吉浦公園金立公園墓地を選定した。

### 土地區劃整理事業

土地區劃整理は本市の助成に依り着々組合の設立、工事の進捗を圖つてゐるが本年度中に設立したものは狩留賀、莊山田、坪之内の各土地區劃整理組合であり、設立助成中のものは湯舟、原、宮原通十二丁目、吉浦町、警固屋町、阿賀町等である。

## 第十四 上水道の概要

本市の上水道は明治三十五年上水道布設調査委員會を設け調査を進めたが、適當なる水源を發見し得ず明治四十四年に至り某方面の餘水分與方を正式に請願すると共に専門技術者により設計に當り、大正二年三月二十四日遂に許可を得たので、同年八月二十二日の市會に提案滿場一致で可決され、引續き國縣補助、起債並工事認可等に約半歳を費し翌四年四月十五日三ヶ年繼續事業として工事に着手、大正七年三月を以て大休の工事を完了し、同年四月一日から給水を開始した、然して高地部は同計畫より除外せられてゐた關係上大正十五年引續き之が調査を開始、昭和二年三月の市會で可決されたので直ちに工

事認可を請求同年八月工事に着手、同五年三月末竣工したので四月一日から給水を開始した。

しかし戸口の増加に伴ひ給水戸數も激増し、上水道大擴張計畫の必要に迫られるに至つたので昭和十三年一月四日、下三永貯水池案は市會滿場一致で議決せられた、現行本市設備概要は左の通りである。

### 設備の概要

給水區域 舊吳市一圓

給水量 一人一日平均三立方尺最大四立方尺とし凡て計劃法なり

送水線路 自然流下法に依つて二〇吋鐵管に依り淨水池に送水す其の延長三、〇八三、五米

淨水設備 淨水場は濾過池及配水池を築造し緩速濾過法に依り淨水す

濾過地 四個より成り、濾過したる水は十四吋鐵管に依り接合井を経て更に集合井に入り配

水池に至る、當時は三池を使用し一晝夜十尺の濾過速度にて一日六十万立方尺當を濾過し得。之に要せし工費は金十万七千八百五十三圓餘なり。

配水池 二池にて、上部九尺五寸を有効水深とし十八万五千立方尺の淨水を蓄ふる事を得、之に要したる工費は五万九千四十六圓餘なり。

配水線路 配水管は淨水池量水井より二十二吋鐵管にて量水器を経て東西に分岐し、十六吋以下三吋となり總延長一三三七五五米なり。

配水池 内法長三十六尺巾三十尺深さ十四尺箱形に鐵管混凝土を以て築造し中央を仕切二個とす。





留																			
市外ヨリ轉寄留	市外ニ轉寄留	復歸	退去	更正	變更	錯誤	抹消	職權記載	新寄留編製	除寄留	寄留手續第十一條	入寄留者身分照會	入寄留者身分回答	追完	接受	出寄留者身分通知	屆書返戻	催告	之
五四九	三四九	五六二	一、八一五	七〇三	六九三	六四八	二、六三七	二二二	五、八八四	三、〇四九	四二六	五、八二一	五、三九一	三三	二七〇	一、三三五	一、二四八	二、三二九	
五七七	三六〇	五一六	一、六四三	六五〇	五八八	五六四	二、四〇三	九八	五、三九一	三、五八三	三三二	五、三〇七	五、一七三	二七	一四〇	一、三九三	一、二六一	二、六三六	
		四六	一七三	五三	一〇四	八四	二三四	二二四	四九三		九五	五四	二八	六	一三〇				
																			五三
																			三七

部				
召喚	寄留照會	寄留整理	出寄留照會	身分再照會
二四二	二、〇九七	三、五六六	二一〇	七六
三〇二	二、一七一	二、一四四	八〇三	一、二四九
		一、四三三		
				四二四
				四七三

### 第十六 保健

軍都たる本市の保健衛生は特に留意を要する處であり、本市では巨額を投じて市立病院の經營、各種傳染病の豫防と防疫、或は尿尿塵芥處理、其他の保健行政に万全を期し、一方市民に對しては常に保健衛生思想の喚起普及を續ける等總ゆる施設事業を續けてゐるが都市發展に伴ふ戸口の激増其他種々なる事情により尙満足の域に達し得ぬは遺憾であるが、當局必死の努力は漸次好結果を齎らしつゝあり、その將來を期待されてゐる。

#### 傳染病發生と對策

前年度猖獗を極めた腸チフス、赤痢も當局の徹底的防疫により一時は愁眉を啓いたが、夏季に入る頃より疫痢、赤痢患者を續發、更に十一月頃よりは再び腸チフス患者を發生昨春に劣らぬ蔓延の徴候さへ示すに至つたので、當局では之が病原につき徹底的調査研究を行ふと共に全力を擧げて豫防、防疫に努めた結果比較的早く終熄を見るを得たが、軍都たる本市に此の如き現象を見るは甚だ遺憾とし、市當局

では適切なる豫防方法を講ずる一方市民の保健衛生思想の普及喚起により傳染病撲滅に努めたのでその後には頗る好結果を得るに至つた

傳染病患者發生五ヶ年比較表

年次	病名										
	腸チブス	チバチフス	赤痢	疫痢	デリヤフ	猖紅熱	流行性腦脊髄膜炎	ナフス	コレラ	痘瘡	計
昭和九年	三八	一〇	二六四	二六五	一一三	一一八	八				一、一〇〇
全十年	二五九	一五	三〇八	二二	一九	六九	三				九六〇
全十一年	二〇〇	四八	三〇三	二六	二五	四六	三				九四二
全十二年	九六〇	一五	四六四	九〇	五〇	九三	三				一、九二二
全十三年	五三五	八〇	四五六	二四四	九四	六九	三				一、四八一
合計	二、二九	三〇五	一、七九七	一、二二六	五〇〇	三九五	二〇				六、四七七
最近五ヶ年平均	四五三	六二	三五九	二三五	一〇〇	七九	四				一、二八三

因に本年度中吳市立病院に入院した患者は總人員千三十六名で内療治者七百四十五名、死亡者二百二十二名、越年患者は六十九名であつた。

傳染病豫防方策

傳染病豫防については之が施設の完備も忽せに出来ないが、一般市民の衛生思想に對する深い理解と正確なる認識を把握せしめることも亦緊要事である。本市では衛生映畫の公開、講演會座談會並衛生展覽會の開催、立看板、ポスター、宣傳ビラの配布、パンフレット、リーフレットの調製頒布或は學童の糞便検査、保菌者検査運動等總ゆる、方面から衛生自治の方途を講じたが、更に國民精神總動員健康週間

其他の機會には

略痰検査、井水検査、傳染病豫防標語募集、空屋消毒、活動寫真プログラム並募合利用宣傳

等も行つたが初夏の候、小學高等學年兒童により實施した蠅取週間の實績は夥しい蠅を退治してゐる。死亡及死産ニ關スル事項

月別	死						産					
	死亡數	一日平均	累計	男	女	不明	男	女	不明	計		
一月	四〇七	一三、一	七九	一五	九		一七	一六		三三		
二月	三六	一三、五	一一二	一四	二五		二七	一八		四五		
三月	三七	一〇、五	一四三	八	二		一〇	二		一二		
四月	二九〇	九、六	一、四〇三	三三	二		一五	七		二二		
五月	三五	一〇、二	一、七二七	三三	三		一四	五		一九		
六月	二九六	九、九	二、〇三三	七	一		一〇	七		一七		
七月	三三	一〇、一	二、三三六	一〇	二		一一	二		一三		
八月	三六三	一一、七	二、六八九	九	九		一一	九		二〇		
九月	三〇一	一〇、三	二、九九九	二	八		一二	九		二一		
十月	三〇一	九、七	三、三〇一	九	二		一〇	二		一二		
十一月	三二一	一〇、四	三、六二二	三	二		一五	二		一七		
十二月	三三五	一〇、五	三、九三七	三	一		一七	一		一八		
計	三、九三七			一四九	一八	五	一七三	一四〇	五	三三八		

結核死亡者五ヶ年比較表

年次	性		計
	男	女	
昭和九年	一五二	一〇八	二六〇
昭和十年	一三七	八九	二二六
昭和十一年	一三九	六六	二〇五
昭和十二年	一一五	七八	一九三
昭和十三年	一六一	九三	二五四
最近五ヶ年平均	七〇六	四三四	一一三八
合計	一四〇	八六	二二七

醫師其他

種別	年次	
	昭和十三年	昭和十二年
醫師	二〇五	一八六
齒科醫師	九七	九六
藥劑師	八五	七三
計	三八七	三五五

衛生組合

昭年十二年吉浦町聯合衛生組合會が吳市聯合衛生組合會に合併せられたのを契期に翌十三年一月には

阿賀町並警固屋町の合併となり、多年の宿望たる全市一丸の衛生団体は結成せらるゝに至つた、吳市聯合衛生組合會の下に現在二百十一衛生組合がある。

第十七 警察及警備

軍都たる本市の警備は頗る複雑であるが市民の自覺協力は犯罪を減少し、火災に對しても亦施設の充實完備と市民の「我等の軍都は我等の手で護れ」といふ熱意ある協力で依り大禍なく、時局下の軍都を靜穩に護り續けてゐるのは本市の誇りであると共に喜びである。

一、出火度数

年次	種別	放火	出火	不明	罹災度		
					全燒	半燒	直數
昭和十年	十一年	十一年	十一年	十一年	七	五	四一
全	全	全	全	全	一八	五	二九
全	全	全	全	全	一	〇	二九
全	全	全	全	全	三	一	二九
全	全	全	全	全	四	一	一五

但シ警固屋、阿賀各消防組ヲ除ク  
二、犯罪

種別	昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年	
	盜	竊	盜	竊	盜	竊	盜	竊
盜	二、六八	二、〇五	一、六四	二、四二	三三	二九	二七	三〇六

船	入	飢	物	斷	池	水	感	工	機	運	其	服	投	自	刃	荷	荷
船	浴	體	岸	沼	沼	泳	電	業	械	搬	他	毒	身	縫	物	車	車
顛	覆	中	餓	敷	落	落	中	場	內	等	テ	テ	他	毒	身	縫	物
	一	二			一	一									二	一	
	一	二			一	一									二	一	
					一	二	一	二									
				一	二	二	一	一	二								
					二		一	一	一	二	一	六		一	一		一
				一							一	四					
				一		二		一	一	二	一	七		五	一		一
											二	一	一	四	三		
											二	四		四			
											四	五	一	八	三		

種別	年次	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
火傷	火傷				
土砂崩	土砂崩				
汽車	汽車		五		
電車	電車			三	
自轉車	自轉車				一
其他	其他				
計	計		一	八	一
男	男		一	三	
女	女				
計	計		一	三	
男	男		四	二	三
女	女				
計	計		二	一	
計	計		六	二	四

三、變

死

縣令	傷	詐	恐	住	法	失	贓	賭
令	令	令	令	令	令	令	令	令
違	違	違	違	違	違	違	違	違
犯	犯	犯	犯	犯	犯	犯	犯	犯
	八	三	二	二		八		四
	九	一、八〇	四	三		〇		五
	七	九七	四	〇		三		五
三、六	八	九	二	八	四、三	六	元	二
贓物ニ關スル罪	選擧違反	強盜	傷害致死	公務執行妨害	背任	放火	過失傷害	殺人及未遂
六	三	四	一	一	二	三	四	二
二	三	七	一	二	一	五		四
九	四	四		四	五	四	四	二
一	七		二	三	一	二	四	六



### 第十八 神社及寺院

本市の吳浦當時は眞宗派だけであつたが軍港設置以來人口増加に伴ひ各宗の建設を見た、今その大要を示せば左の通り。

#### 一、神社

**龜山神社** 本社は吳市に於ける總氏神で清水通に鎮座す、往時は宮原村字龜山即ち現在の鎮守府長官々舎所在地に在つたが、明治十九年軍港設置の爲移轉明治二十年五月現在の所に遷座さる。境内は景勝の地を占め展望甚だ佳、祭日毎年十月十七日。

**八幡神社** 吉浦町村社で小早川隆景の建立に依る、祭日は毎年舊曆八月十五日。

**宇佐神社** 警固屋町古字郷堤にあり村社、祭日毎年秋季皇靈祭

**鯛宮** 三津田にあり昔は漁業者の守護神として參詣多く、境内に第六第潜水艇殉難者記念碑あり年々莊嚴なる慰靈祭を執行さる。

#### 二、寺院

**明法寺** 眞宗本願寺派で寺迫にある、往昔眞言宗溪山明法寺と稱し僧西空の創始する所吳浦の城主末永常陸守の祈願所であつたが、一旦廢寺となり元龜の頃可部の城主熊谷元國の末孫國勝剃髮して西念と稱し、本願寺十二代目准如法主の弟子となり此の寺を再興す、本市第一の巨刹で常に念佛の聲は絶えない。

**西教寺** 莊山田村長ノ木にあり元眞言宗灰ヶ峰淨院と稱し寛正の頃僧諦念の建立せし所天州

志賀郡の領主岩崎若狹守の入道したもので本寺開基の始祖である、其の他市内主なる寺院を列記すれば左の通り。

名稱	位置	宗派	名稱	位置	宗派
神應院	清水通	曹洞宗	一華寺	北迫町	臨濟宗
萬年寺	全	眞言宗	誓光寺	吉浦町	眞宗
正覺寺	本通十二丁目	淨土宗	善妙寺	警固屋町	全
正圓寺	宮原通	眞宗	實徳寺	阿賀町	全
法華寺	寺本町	眞宗	西光寺	全	全
明西寺	三城通	眞宗	稱明寺	阿賀町	全
照明院	本通十三丁目	眞言宗	法幢寺	全	全
養運院		日蓮宗			

尙教會説教所は各所に設立され現在百餘ヶ所あり

### 第十九 附錄

#### 支那事變大博覽會の開催

今次事變に於ける皇軍活躍の跡を偲び、忠勇無比の勇士の武勳を稱へ、以て銃後國民に事變に對する正しき認識を與へ、國防の充實強化を期するは軍港市民の責務であると信する本市では、端的に且つ簡易に聖戰の意義全貌を國民に理解せしめるは博覽會の開催に勝るものなしとし、昭和十三年三月二十五日

から同年四月三十日迄の三十七日間陸海軍省、文部、商工省、吳鎮守府並第五師團後援の下に市内二河公園に於て「支那事變大博覽會」を開催した、都市、農村を問はず時局下繁忙の際ではあつたが、本會の趣旨、施設は各方面に反響を呼び來觀者は豫想外に多く、本會の目的は十二分に達成して閉會するを得た、會場設備其他要領左の通り

一、開 期 自昭和十三年三月二十五日、至昭和十三年四月三十日

一、開 館 時 間 每日自午前八時、至午後十時

一、入 場 料 大人(一人に付)二十五錢 △現役下士官兵並男女中等學校生徒(同上)十五錢 △小人(同上)十錢

團體に對しては普通團體、學生々徒團體、小學兒童團體に分ち各割引す

一、經 費 二十万円

一、會場施設

1. 記 念 館 (南北二館)第一線將士の活躍の跡を偲ぶに充分なる記念品、本事變に尊い犠牲となりたる戦歿勇士の遺品等を陳列展觀し、その勳功を稱へ、活躍に感謝の意を表した、陳列点数約三千点

2. 兵 器 館 我軍使用の近代化學兵器を陳列し、一般國民の信頼と期待を深めた

3. 戦 利 品 館 今事變に支那軍の使用した各種兵器、其他戦利品を陳列、皇軍の活躍の跡を偲ぶに十分であつた

4. 航 空 館 航空機に關する各種資料、模型等を陳列國民の航空知識涵養のため最も効果を擧ぐ

を擧ぐ

5. パノラマ 館 我海陸共同作戦による南京城攻略及大空中戦、大兵團輸退及渡洋爆撃行の二大パノラマの外元冠の役を作成、いづれも動力装置により觀覽者に深い感銘を與ふ

6. 軍需工業 館 時局下に於ける我軍需工業界の全貌を展示、世界に卓越せる我軍需工業界の眞價を確認するを得た

7. 野外戦線大模型 我國博覽會施設最初の企てとして地物をその儘利用し、等身大人形其他により戦場各場面を設け、銃砲聲の擬音装置等を加へて好評を博す

8. 對支貿易 館 本縣下に於ける對支貿易品を展示多大な効果を擧ぐ

9. 餘 興 軍事ニユース館、軍事教育劇場經營の外音楽堂に設けたる野外劇場に於ては各種公開餘興を行ふ外子供のためには子供の國を設置す

10. 其 他 挾射撃場、機關銃射撃場に於ては各之が射撃を實施し、燒夷彈威力、軍犬訓練等を公開した

尙本會開催中には本派本願寺法主親修にて支那事變全國戦歿者慰靈大法會を行つた外、各種大會も多數行はれた。

第二十、軍 港 案 内

吳 鎮 守 府 明治二十三年、長くも 明治天皇御臨幸のもとに開應の式を擧げられた由緒深いものである。構内には翠綠滴たる樹木茂り樹下は塵一葉も認めず日本海軍の明朗清澄な氣を與へてゐる

**吳海兵團** 海兵の家庭とも云ふべき所、海軍に入つたら先づこゝで基礎教育をうけ、退團の際も此處で公民教育或は職業指導を受ける、地方人とも極めて縁故深く軍港見學者には團内の觀覽も許され、案内説明等の便宜も與へられてゐる。團内には各種教育参考品等も多く、地方人憧憬の軍樂練習所、大プール等もある。

**第六號潜水艇** 潜水學校門前には我が潜水艦發達史上尊い犠牲となり、悲壯な最後を遂げた佐久間艇長以下十四勇士の遺品を保存する養正館、沈没當時の儘で引揚げられた第六潜水艇等がある。

**海軍兵學校** 景勝に富む江田島は、海國日本を背負ふ海將の搖籃の地として若人の憧憬の的である、海軍兵學校は明治二年東京に海軍操練所を設けられたに始まり同二十一年海軍兵學校と改稱されて此の地に移轉したもので、白聖の大講堂は世界的名建築の譽を擔ひ、校内にある海軍參考館は東西古今の名將の遺品、或は世界に得がたい海の參考資料を網羅してゐる。

**海軍潜水學校** 潜水艦は航空機と共に我が國防には必要なき難い武器である、潜水學校は優秀なる潜水艦乗員を養成する唯一の機關で列強の亦羨望するところである。

### 第二十一 吳及近郊の名勝

**二河公園** 吳驛の西北方二河川に臨む約三萬坪の二河公園は先帝陛下の御大典を記念するた、め大正四年造園したもので未だ古色には乏しいが花樹は年と共に繁茂して明鏡の池畔に映へ、近代的风致を加へて四時市民の散策は絶えない、園内に設けられた野球場を初め各種運動場はさすが運動王國吳の名に叛かず、日曜祭日には數萬人に達するファンを集め關西稀に見る盛觀を呈してゐる。

**二河峽** 二河公園から西北方十數丁に及ぶ溪谷一帯を二河峽と呼んでゐる、奇岩怪石に富み老樹天日を蔽ふて深山幽谷を想はせ、峽谷まるところに男灘女瀧の二瀑が懸る、此の地に至れば巨岩愈々重疊として左右から迫り、老松巖上に蟠踞して飛瀑に臨みその妙趣は真に一幅の名畫である、しかも市街地にかくの如き峽谷を持つことは全國稀有のことで、同峽を觀賞する雅客の齊しく感嘆する處である。

**鯛の宮** 二河川を渡り西本通電車停留所から西へ約一丁行けば、愛宕山の麓、鯛の宮に達す鯛の宮はその昔吳浦の漁民が海の幸を祈るため、釣神事代主尊を祭り鯛漁を献じたことからこの稱が起きたと云ふ、境内には第六潜水艇殉難記念碑があり中空を摩してゐる。

**第六號潜水艇殉難記念碑** 明治四十三年四月十五日、山口縣新港沖で潜水訓練中であつた第六號潜水艇は遂に浮かばず、佐久間艇長以下十四勇士は悲壯な最後を遂げた、然も乗員は全員従客自若として自己の部署につき、萬策を盡し、その周到なる遺書は千古不磨の文字として懦夫を起たせ、潜水艦發達史上光輝ある一頁を飾つてゐる、この烈士不朽の事蹟を後世に傳へるため吳市愛宕山の一角鯛の宮境内に白聖の高塔を建て、市民は齊しく之を仰いで當年の勇士を偲んでゐる。

**湯舟** 溪 幽雅閑靜な谿谷からはアルカリ性に富む靈泉が湧出でて温冷泉の設備がある、谿谷一帯は古松老杉茂つて三伏候暑さを避ける者が多い、附近の小丘は眺望によく、その昔弘法大師が諸國巡錫の際開かれた所として有名。

**龍涎** 峽 吳市外廣大川の上流、古來二級の瀧と稱せられて縣下第一の大瀑布を中心とした一帯を云ふ、既に「名勝地」として推薦されてゐる、近年峽谷一帯に甌穴群を發見され、龍涎峽と命名

された、就中全國第二の發見といふ甌穴の瀧壺、底無し甌穴等は天然記念物の優たるものとして、近く指定をうけることになつてゐる、幽翠閑寂の峽谷、雄壯寥々たる飛瀑を臨み、點々群在する甌空を尋ねるのも亦興趣盡きぬものがある。

音戸の瀬戸

今を去る八百年前、全盛を極めた平清盛が、嚴島參詣の航路を作るため、切りひらいたといふ傳説の音戸の瀬戸は「船頭可愛や音戸の瀬戸で一丈五尺人の櫓がしわる」の民謡で知られる急潮であり、「出船入船この瀬戸越せと向ふ音戸の灯がまねく」と民謡にもあるやうに、情緒の港でもある、警崗屋と音戸の兩岸を洗ふ急潮は月夜の觀潮によく、附近の風光は常に飄客を誘つてゐる、海峡に臨んで清盛塚や、開峽に因む日招き岩等がある。

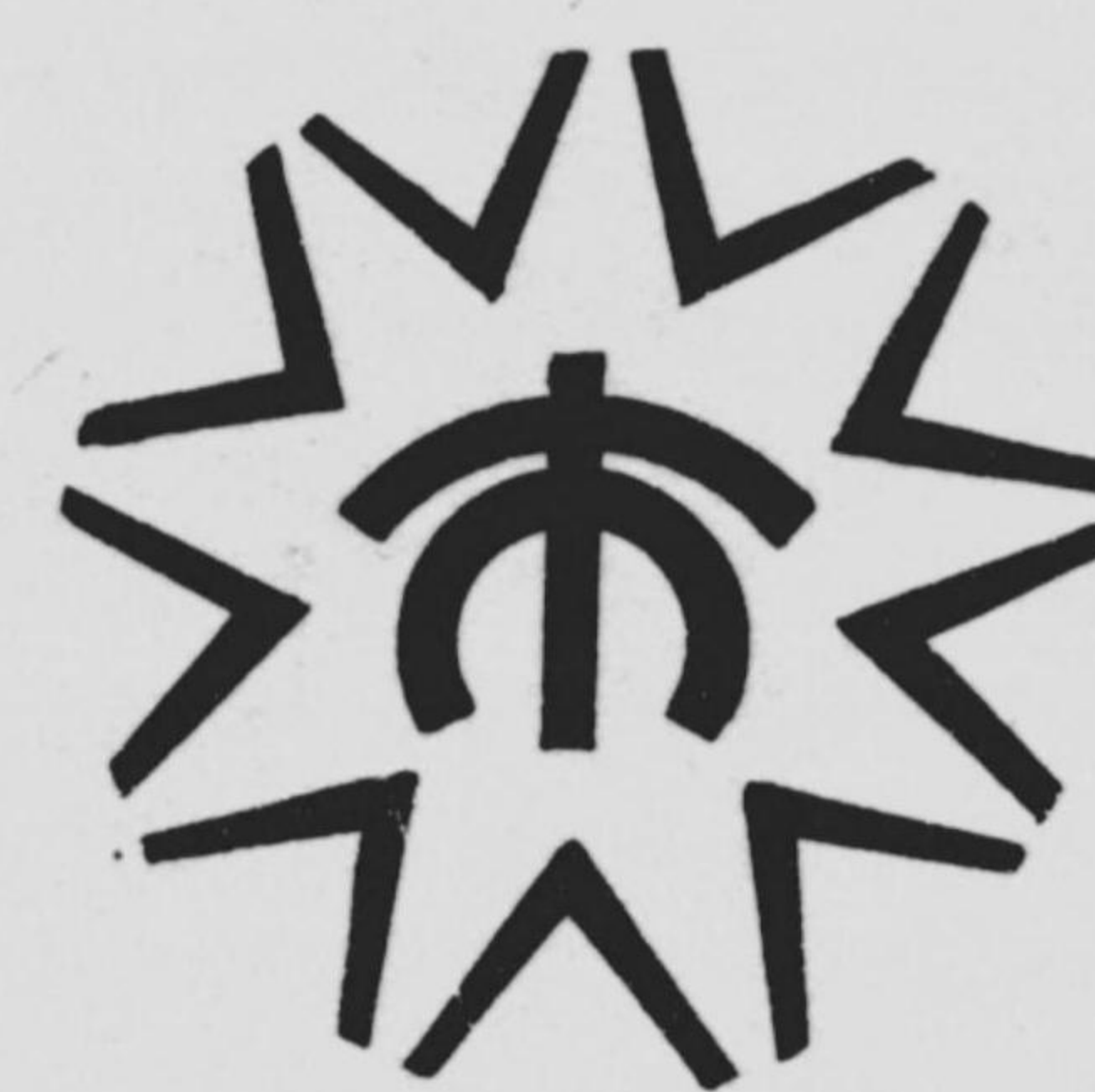
昭和十五年六月十日印刷  
昭和十五年六月二十日發行

編輯兼 發行者 吳 市 役 所

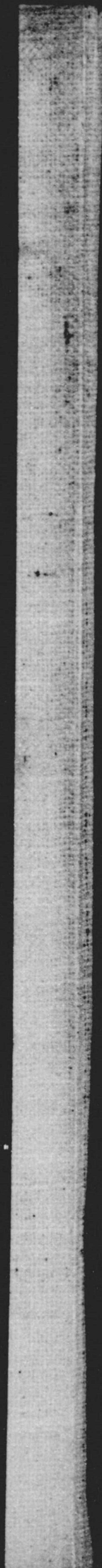
印刷者 吳市本通十二丁目十二番地 林 春 雄

印刷所 吳市本通十二丁目十二番地 林 印刷所  
電話四一六六番





44  
110



11/15/52

11/15/52

